
切磋琢磨の観察日記

るーずりーふ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

切磋琢磨の観察日記

【Nコード】

N0944N

【作者名】

るーずりーふ

【あらすじ】

趣味は人間観察。我ながら悪趣味だと思う。

そんな主人公、切磋琢磨がいろんな人に出会い、ちょっと変わった学校生活をおくっていく、そんな話。

春の章1（前書き）

切磋琢磨《せつさたくま》

学問や技芸を練り磨くこと。

また、志を同じくした仲間同士が互いに励まし合って学問や仕事に励むこと。

春の章 1

太陽の表面を覆うガスのことを「コロナ」というそうだが、密度が薄くて、目では見えないらしい。

春の章（4月15日、水曜日、晴れ）

趣味は人間観察。我ながら悪趣味だと思う。

ただ、成績は中の上、得意なスポーツは無し、ルックスは中の下。人より格段に劣っているものもなければ、秀でているものもない。あえて言うなら、人を見る目が少しばかりあるくらいだ。

で、人間観察だ。誰だっけ自信のあることを趣味にしたがるだろう。それと同じだと思えばいい。

四月の教室というのは、そんな俺の目が試される場だ。

特に、中学一年、入学したての一週間というのは、素晴らしい観察環境と言えるだろう。

周りには名前も知らない新しいクラスメイト。中学校という新しい場所。これ以上ないくらいの好環境だ。

そんな中、俺の興味を引いたのは、高宮瞬だった。

入学式の日、教室に入っただけで分かった。ああ、あいつが太陽か、と。

どこにだってこんな奴はいるだろう。スポーツができ、頭もいい、友達も多い、カリスマ的なものを身につけた奴。そういうのを俺はクラス替えの度に見てきた。彼らは自分を中心にして色んなものをぐるぐる回し、光を分け与え輝き続ける。その光の強さでクラスの勢いとかそういうものが全部決まってしまうんだから不思議だ。

そして彼、高宮瞬は今まで俺が見てきたどんな太陽より輝いていた。

背が高く、白い歯が印象的なさわやか君でありながら、スポーツ

は万能。専門は陸上だそうで、噂によると去年、どこぞの大会の百メートル走で大会新記録を出したとか。もちろん勉強もよくでき、噂によると都内の有名私立中学に受かっていながら、両親の都合でここに通っているとか。さらにその話術は恐るべきもので、彼の周りには大勢の人が集まり、常に談笑が絶えない。

神は二物を与えずなんて誰が言ったんだろう。こんなのおかしいじゃないか。一体何を与えればこんな完璧人間が出来上がるんだ。あ、もしかしたら「完璧」というのを与えられたらあんなふうになるのかも知れない。うん、そうだ。そんなスペシャルアイテムなら一つで充分全ての才能を備え付けられる。そうか、そうだったのか、なるほど。

これが俺の中学校生活一週間分の成果だ。もう、クラスメイト達の微妙な力関係や女子達のグループ分けなどはできあがってきていて俺の把握も抜かりがない。最近は部活動や教師、先輩の観察も行っている。本当に、四月っていうのは飽きなくていい。

さて、ただ今十一時五十分。空腹を抱える腹の音がグルグルとうるさい四時間目である。

中学の体育というのは、小学校ほど楽しいものではない。不運なことに四時間目なんてところに居座っているもんだから、動こうにもエネルギーがない。空腹を忘れるくらい夢中になればいいのだが延々と五十メートルのタイム取りばかりをする授業を楽しくて仕方がないと思えるようなら、そいつはきつと走り中毒だ。

「はい、次。」

これは……確か十一本目だ。そろそろ肺の限界が近付き始めている。

「位置について、用意……」

まだか、まだか、まだか！この教師、やたらとタイミングを外したがるのだ。

「パン！」

ピストルの音が高く鳴った。

こんな体育の五十メートルごときにピストルなんか使っているだろうか。テスト中のクラスもあるだろうに、バンバンバン・・・・と要らぬ心配をしながら肺に優しい走りを始めた俺の隣で「シュツ」という音。一瞬にして風が通り過ぎる。

なんだ、なんだ。顔を上げると、力強く地面を蹴る後ろ姿がぐんぐんと遠ざかっていくところだった。

げっ、高宮瞬だ。完璧なまでの美しいフォーム。躍動感あふれる足の運び。間違いない。

俺は慌ててギアチェンジする。一緒に走った奴に応援されながらのゴールインなんて、みっともないにも程がある。

五十メートルは二人ずつ順番に走っていくという単純なものだが、このクラス、男子の人数が十七人なのだ。最後の一人を余らせるわけにもいかないので、必然的に二人組の組み合わせがずれていくことになる。ああ、もっと早く隣を確認していれば・・・・

後悔してももう遅い。相手は大会新記録保持者なのだ。限界近くの俺なんかちょっと頑張ってみたところで何の効果もないことは目に見えている。

「頑張れー！もうちょっとー！」

前から声援が聞こえてきた。やっぱりこうなったか・・・・。俺は最後の力を振り絞って前のめりにゴールした。

急なギアチェンジは想像以上の負担がかかっていたようで、もうこれ以上走れそうにないくらい足が重い。

まったく、十一本目にもなって本気出したりすんなよ。こっちまで真面目に走らなきゃならない。世の中省エネの時代だっていうのに・・・・。

軽く睨んでみると高宮はもうストップウォッチ系の生徒に記録を聞いているところだった。結果が読み上げられる。

「えーっと、一着、六秒四八。二着、十二秒〇五。うわっ、六秒台かよー！すげーな。」

……十二秒台はマズイだろ。いくらなんでも。

「え、六秒四八？よっしゃ。新記録！」

高宮は嬉しそうにガッツポーズなんかしている。

周りの奴らが祝福と羨望の眼差しを向け、口々に「やったな」とか「おめでとう」とか言いながら集まってきた。

普通、優れたものを持つ人というのは周りから反感を買いがちだが、高宮はなぜかそれがなかった。

今のように好記録を自分で喜ぶ姿というのは見ているだけで微笑ましい気分になってくる。きつと「さっきのは新記録だったのか。だからあんなに速かったんだ。」と納得することで自分との力の差を少しでも小さくすることができるからだろう。

誰だって、自分より足の速い奴が「うわー、七秒台だ。ぜんぜんだめじゃん。」と落ち込むところを見せられれば、じゃあ八秒台の俺はどうなるんだよ、とイライラしてくると思う。

自分の成功をしつかり喜び、失敗は嘆かない、これも高宮が太陽であるゆえんなのだ。

それにしても、六秒四八って……あんたは化け物か。

五、六人に囲まれながらスタート地点へと戻っていく高宮を目で追いつつ、俺は必死で重い足を動かした。

まったく、なんでこういつもいつも誰かに取り囲まれているんだろうか。それも特定の奴とツルんでいるわけでもない。たまたま近くにいる奴がまるで吸い寄せられるように集まっていくのだ。窮屈だとか、うつとうしいとか思わないんだろうか。

それになにより、なんで常に話をしていられるんだ。ネタが尽きることはないのか？

その時、ふいに高宮が振り返った。なんでそうだったのか、ただの偶然だったのか、そんなことは知らない。

ただ、その視線がすぐ後ろを歩く俺のものどぶつかったことは確かだ。

いきなりのこととっさに立ち止まる俺。

真つ直ぐな視線が空中で絡み合う。それは一瞬のことだったのに、妙に濃密で俺の記憶にこびりついた瞬間だった。

俺は見てしまったのだ。あの目を。

人を見下す氷の目を。

「・・・・・・・・」

春の生暖かい風が砂埃と共に流れていく。

バン、というピストルの音が遠くで聞こえる。

俺はしばらく、その場から動けずにいた。

あれは、あの目は俺が見てきたような太陽の目じゃない。

太陽が、それもあれだけの輝きを持つ奴が、取り囲まれ、楽しそ

うに話しながら、あんな目をするはずがない。

でも、あの時、高宮の目には確かに相手を軽蔑し、嘲るような光

があっただ。

なぜ？どうしてそんな目をする？

俺の経験を持ってしても、分からない。未知の領域。

知りたい。

高宮瞬。あんたはどんな人間なんだ？

「じゃあな、切磋琢磨。掃除、よろしくな。」

「おう、じゃあな。」

走っていく音が遠くなり、教室には俺一人が残された。

誰もいない教室っていうのはなかなか落ち着く。ぼんやり聞こえてくる吹奏楽部のへたくそな不協和音もいい感じだ。

なぜ、こんなことになっているのか。

こんな契約をしたからだ。

「なあ、切磋琢磨。ちよつと話がある。」

「何だよ。」

「俺は今日、見たいドラマの再放送がある。授業終わってダッシュで帰れば間に合うかも知れない。でも今日は掃除当番だ。」

「つまり？」

「当番を代わって欲しい。」

「わかった。じゃ、はい。」

「何だよその手は。」

「百円。」

「……………しょうがねえな」。ほらよ。」

「毎度。またのご利用お待ちしております。」

おわかりいただけただろうか。

こういう訳で、掃除をしているのだが……………

何で俺一人なんだ。

おかしい。これは絶対におかしい。当番は他に四人いたはず。みんな登校していたから、教室に俺一人というこの状況はあり得ない。

……………もしかして、俺、ハメられた？え？ハブられた？

何とも言えない恐怖や不安がぞわぞわと這い上がってくる。

しかし、この時の俺は知らなかった。

ドラマの再放送を楽しみにしている人間が少なくなっていることを。

そして、当番をサボるのにいちいち誰かに代わってもらったりする律儀な人間が意外と少ないということ。

「・・・ドン。・・・ドン。・・・ドン。」

明日のクラスメイト達の態度を心配しながら戸締まりの確認をしていた俺の耳が鈍い音をとらえた。

「・・・ドン。・・・ドン。・・・ドン。」

それは一定の間隔で聞こえてきて、その度に振動が伝わってくる。古くなったドアがガタガタと音を立てる。

「・・・ドン。・・・ドン。・・・ドン。」

何事だ？ゴジラの行進か？

どうやら、それはアリジゴクから聞こえてくるようだ。

俺はもう掃除どころではなくなっていた。だって気になるじゃないか。ゴジラが学校を踏み潰したらどうする。

俺は、ゴジラの侵略を阻止するために教室を飛び出した。その足は真っ直ぐに屋上へと向かっている。

ここで、アリジゴクの説明をしておこう。

この学校は、実におかしな造りをしている。

まず、カタカナの口を想像してもらいたい。漢字の口でもかまわないが。それが我が校を上空から見た形になる。体育館と「コ」の字型の校舎が真ん中の空間を囲んでいるのだ。その空間がアリジゴクだ。ずっと昔からそう呼ばれているらしい。

しかし、このアリジゴクは、周りを高い校舎に囲まれているため、日が射さない。無駄なことを極度に嫌う学校は口の内側の壁に窓もドアも全く作らなかった。

つまりアリジゴクは、入ることも出ることも、校舎の中から見ることできないのだ。アリジゴクを眺めるには、屋上に上がり、フエンスから身を乗り出さなければならぬ。

まあ、教室の半分の広さしかないアリジゴクをわざわざ見に行くような物好きなんて、いないに等しいのだが。

階段を二段とばしに駆け上り、屋上のドアの前にたどり着いた。

「ここは鍵がかかっている。でも、問題はない。」

「三日程前に廊下ですれ違った二人組の先輩達の話思い出す。」

「なあ、知ってるか、屋上のドアの秘密。」

「何だよそれ。」

「あれ、鍵がかかってるだろ。でも、この学校ボロいから、鍵もかなり古くなってる。」

「開くのか？鍵が無くても。」

「コツさえ掴めばな。まず、ドアノブを九十度回す。」

「俺は正確に九十度ドアノブを回した。」

「それから、上に持ち上げる。」

「ドアノブを両手で持ち、足を踏ん張って持ち上げた。」

「そうすると、ドアと床の隙間が広がるから、そこに足を突っ込んで、その足でドアをガタガタ揺する。」

「ドアの重みが全部、突っ込んだ足にかかって痛かったが、何とか耐えてドアを揺らした。」

「ドアノブを百八十度回して、思いっきり引っ張る。」

「バキッ！嫌な音がしてドアが開いた。」

「・・・まさか、壊れたんじゃ・・・」

「いや、そんなことより。」

「急いでフェンスまで駆け寄り、下をのぞき込む。」

「・・・ドン。・・・ドン。・・・ドン。」

「ゴジラの正体は、サッカーボールを壁に蹴り続けている高宮瞬だった。」

ゴジラの正体は、サッカーボールを壁に蹴り続けている高宮瞬だった。

四時間前に見た、あの氷の目が頭をよぎる。

気付いたら、普段出さない大声で話しかけていた。

「おい、何、やってんだよ。」

高宮がボールを蹴ったままの体勢で一瞬固まった。そしてすぐに顔を上げ、その目が屋上の俺を捕らえた。

壁で跳ね返ったサッカーボールが隣を転がる。そのまま、無言の時間が流れた。

傾いた太陽が日陰を広げる。

それでも、高宮の周りだけは光っていた。自分が太陽であることを誇示するかのように、日の届かない場所に光を分け与えていた。

まっすぐ、こちらを射抜く視線が痛い。

先に口を開いたのは高宮だった。何事もなかったかのように、サッカーボールを蹴り始めながら言う。

「何って、サッカーだけど。」

それがさつき俺が聞いたことの答えだというのに気付くまで少し時間が要った。その間に、また高宮はサッカーにのめり込んでしまう。よく見ると、ボールが跳ね返る壁が凹んで変形していた。

「なあ、そんなにサッカー好きならサッカー部入れればよかっただろ。」

再び声をかけると、うるさそうに睨まれた。今日はなんとなくいつもの高宮と様子が違う。

「別に。サッカーが好きって訳じゃない。」

「じゃあ何でそんなに練習してるんだよ。」

「そんなにやってない。さつき始めたばかりだし。」
高宮の蹴るボールの速度が上がる。

「さつき始めたばつかりで壁の形は変わらないだろ。少なくとも丸
一日は蹴り続けないと。」

「……………」

高宮の足が何も無い空間を蹴った。ボールがその横を通り過ぎ、
後ろへ流れる。

「何でアリジゴクに通い詰めてまで、練習してるんだ？」

「……………そこにボールがあったから。」

頑固者め。

「そんなところにサッカーボールはない。」

「……………」

高宮は、空振りしたボールを取りに行こうとはしなかった。その
場につ立って、壁の凹みを眺めている。

そして、唐突にこつちを仰ぎ見た。

「君、切磋琢磨君だよな。いくら近付いても僕に話しかけてこない
から、変わった人だとは思ってたけど、ここまで追い詰められるな
んて思ってたなかった。」

そう言うと、クルツと音がしそうな程に体を回転させ、後ろのボ
ールの所まで歩き、さらに二歩下がって……………なんとボール
を空高く蹴り上げたのだ。

それは美しい放物線を描きながら、高い校舎をもともせず、屋
上にいる俺の腕に飛び込んできた。

「そんなに知りたいなら教えてあげようか。僕は、来週の体育のた
めに、ここで練習してるんだ。次はサッカーをやるって言ってただ
ろ。ちなみに、あそこにある小さい凹みはバスケットボール。凹ん
でないけど、あっちの丸い跡はピンポン球で作ったんだ。」

テニスに、バスケットに、卓球。全部体育の種目じゃないか。

「もしかして……………体育の授業のための練習、とか？」

「そうだよ。たとえ体育の授業でも、万全のコンディションでプレ
イしたいからな。」

「……………それって、他のことでもやってんのか。テストとか、調理

実習とか。」

「当たり前だろ。前日に、翌日のクラスでの話の種を二十個は考え
ておくくらいだ。八割は作り話だけ。」

二十個！？の八割で十六個の作り話！？それだけ考えられれば今
すぐ就ける職業が結構ありそうだ。いや、その話、暗記するのがす
ごくないか。

でも。

「・・・そういうの、疲れねえ？」

「え？」

「だから、そんなふうに一生懸命完璧な自分繕って、周りから変な
期待されて、もっと完璧になろうとして、頑張っても頑張っても、
高宮瞬ならそのくらいできて当然だって、一言で片付けられる。で
も、頑張らないわけにはいかない。期待に応えなきゃいけない。な
んか、あんた、いろんなものに追い詰められてる感じがする。もう
全部嫌になつたりしないのか？」

サッカーボールを投げ返す。白黒模様が地面に落ちていった。

高宮はそれを片足で受け止め、首を傾げた。

「君の言っていることが分からない。頑張って何が悪いんだ。期待
されるんだから、応えるのはいいことじゃないか。僕にはそんなこ
と、苦労でも何でもないし、何でもできるのが当然だと思われれば
それは僕にとって嬉しいことで、別に追い詰められてるわけじゃ
ない。」

高宮の声を遮るようにして思わず出た大声は、周りの壁で反響し
ながら地面に落ちた。

「じゃあ、あの目は何なんだ！今日の体育で五十メートルのベスト
タイムを出した時の、人を見下すような目は。お前は嬉しいときに
あんな目をすんのかよ！」

フェンスがきしんで音を立てた。俺は初めて自分が相当危ない体
勢でいることに気付き、乗り出していた体を元に戻した。

高宮がゆっくりと口を開く。

「・・・頭がおかしくなりそうなんだ。」

その声は呟き程になっていたが、平静を取り戻した俺の耳にははつきりと聞こえてきた。

「誰かを見下してないと、やってらんないんだ。」

高宮の視線は屋上よりもっと上、空に浮かんだ一つの雲に注がれていた。

「小学生の時、テストで五十点以上を取ったことなんてなかったんだ。そりゃそうだよな、勉強しなかったんだから。」

でも、三年の時、担任の先生が僕に言ったんだ。『次のテスト、一回本気でやってみなさい』って。

その先生は口で言っただけじゃなくて、ちゃんと僕の勉強を見てくれた。もちろん、授業以外でもね。そのテストで、生まれて初めて百点を取ったんだ。先生には『あなたはやればできる子なのよ』って言われた。確かにそうだった。試しにいるんなことをやってみたら、勉強もスポーツも何もかも、練習すればした分だけどんどん上手くなっていくんだ。

気付いたらクラスで一番になって、学年で一番になって、学校で一番になってた。そのうち、自分が一番じゃないと気が済まなくなってきた。誰かに負けたら必死に練習した。これが不思議なことにやればいくらでも伸びるんだ。

そうしたら、もう僕に勝てる人が一人もいなくなった。だから、今度はみんなとの差を広げるために頑張った。少しでもくつきりした一番が欲しくなってきたんだ。

そんな時、周りからトップレベルの私立中学を受験するように勧められた。断ったら負けみたいないな気がしたから受験を決めて勉強したんだ。

君も知ってるだろ、この噂。でも、入学しなかったのは両親の都合なんかじゃないんだ。

僕は受験者の中でも高得点で合格した方だった。だけど、主席じゃなかった。上には何人も人がいて、そのことにショックを受け

たんだ。僕は一番に慣れすぎた。この学校じゃやっていけない。そう思ったから入学を辞退したんだ。

でも、その時僕の中で何かが変わった。いくら頑張っても、上がいくらでもいるっていうことが、全てで一番にはなれないっていうことが分かったからだと思う。

それから、人を見下すことでしか一番を確かめられなくなった。いや、見下すことで自分が井の中の蛙だってことに気付かないフリをしてるのかもしれない。

君はすごい人だと思うよ。僕の本心を見破ったんだから。今の人氣を維持するために、表面に笑顔を貼り付けてるし、言動にもいち気をつけてるから、ほとんどの人は騙されるんだ。なかなかできることじゃない。僕はあんまり人を心から褒めたりしないんだけど、本当にそう思う。」

高宮が再びサッカーボールを蹴り始めた。もう俺のことなんか見もしないで、目の前のボールに意識を集中させている。

アリジゴクという狭い空間でサッカーボールを追う高宮。それを上から眺める俺。

おもしろい。あなたは俺の想像を超えた唯一の人間だ。そこまでの負けず嫌いだなんて、思いもしなかった。

興味がわいてくる。好奇心が膨れあがる。止まらない。もっと知りたい。

あなたは、何を、どう捉え、考えているんだ。その氷の目には何が映っているんだ。

アリジゴクでちょこまかと動き回る高宮が、箱に入れられたモルモットにしか見えなくなっていた。

これから、学校が楽しくなりそうだ。さて、何から実験しようか。試したいことがたくさんある。あれも、これも。

そうだ。一つ聞き忘れていたことがあった。

「なあ、高宮。」

高宮の動きが止まり、視線が上がった。

「どうやってそこに入ったんだ？アリジゴクには窓もドアもつながってないだろ。」

すると、高宮の唇の端がキュツと上がって、幼稚園の悪ガキみたいな笑みが浮かんだ。高宮のこんな顔は見たことがなかった。

「知ってるかな、アリジゴクの秘密。ここ、本当は配水管を通すための場所になるはずだったんだ。設計のミスで上手くいかなかったみたいだけど。でも、配水管がつながる先の段階は出来上がってるんだ。つまり、水漏れの時のために、作業員用の出入り口がついてるってわけ。一階の女子トイレの一番奥の個室、後ろの壁に扉みたいなのがついてるんだ。そこを開けたら、ここに出てくる。」

え、でも、それって……

「あなた、もしかして、女子トイレに入ったのか？」

静けさの後、高宮がぼそつと呟いた。

「……そこには触れないでもらいたかった。」

4 (前書き)

春の章最終話です。

その日からだ。高宮の中で俺の存在が浮かび上がってきたのは。

高宮が、作り話に花を咲かせるため集まってくる連中の中に俺を無理矢理引き込むようになったのだ。「なあ、切磋琢磨、君も知ってるだろ、この話。」という風に、半ば強引に太陽の隣に据え付けられる。

周りの奴はそんなこと気にもしない。太陽だけを見ているからだ。いつの間にか、高宮の隣が俺の特等席になってしまっても、あいつらにはそんなこと関係ないらしい。「あれ？あの二人、あんなに仲良かったっけ。」くらいにしか思われない。

そのくらい、太陽の側にある俺の輝きは少ないのだ。目にも見えないほどに。

高宮は自分の周りに俺という緩衝材を置いたようだ。それはまるで太陽を覆う見えないガス、コロナのように。

正直、こういうのは嫌いだ。

偽りの笑顔で固められた空間に、騙されていることにすら気付かず集まる人。そうして出来上がった世界に組み込まれる自分。居心地が悪くてしょうがない。

ただ、この現状を変えようとは思わない。居心地の悪さと引き替えに、俺は絶好の観察環境を手に入れたからだ。

クラスの誰よりも太陽を近くで見られる特権。手放すのはもったいない。少しの我慢くらい、喜んでするさ。

こうして俺と高宮は、世間一般に親友と呼ばれる関係を作り上げたかのように見せかけていた。

そんなある日、俺は滅多にしない大失敗をしでかした。

重いバッグを背中で背負って、桜並木を歩く。俺の隣にはもれなく付いてくる高宮瞬。もちろん、バッグはちゃんと肩に掛けている。

何を話すでもない。並んで歩くだけの帰り道。

そう、いつもと同じ。全く変わらない日常。もしかしたら、春の陽気で頭の働きがおかしくなっていたのかもしれない。だから、あんなことを言ったんだ。

遅咲きの桜ももう散り際で、道路には薄桃色の斑点が描かれていた。

きれいな模様を踏まないように避けながら歩く。

この時、初めて帰り道の日常を壊した。

「なあ、高宮。俺と一緒にいて、楽しいか？」

どうしてこんなことを言ったのか、今でも分からない。それはごく自然に口から出てきた言葉だったのだ。誰かに会ったら「こんにちは」「食べる前には」「いただきます」を無意識のうちに言うように後悔は大きかった。言い終わってから立ち止まってしまったほどだ。でも、ひどく焦っているというこの状況を高宮に悟られなくなかったし、実際気になってはいたことだったので、俺は答えをそのまま待つことにした。

高宮も歩みを止め、俺の方を振り向いて言った。

「どうしたんだよ、急に。いきなり話しかけてきたと思ったら。」

「別にいいだろ。」

完全にふて腐れていた。

高宮が続ける。

「楽しいか、楽しくないかって聞かれたら、楽しくない。」

「・・・あなた、本当はひどい奴だったんだな。」

「今頃気付いたのか。でも、一つわかったことがある。」

高宮が歩き始めたので俺も後に続く。一メートル先にある足は俺と同じように、上手に斑点を避けていた。

誰かに聞かせるには小さいけれど、独り言にしては大きい声が聞こえてきた。

「一緒にいても、楽しくはない。でも・・・君の隣が一番、楽だ。」
強い風が吹き、無数の花弁が視界を染めた。再び立ち止まった

俺達の間を、薄桃色が流れていった。

ニヤリ、と笑う。

どうやら、大失敗をしでかしたのは俺一人ではなかったらしい。

夏の章 1

宇宙を漂うゴミのようなもの、「宇宙塵」というそうだ。
「うちゅーじん」と読むらしい。

夏の章（七月二十六日、火曜日、曇り）

夏休み第一日目、教室に入ってきたその人は、クラス中の誰もを
啞然とさせた。そして、

「きゃーっ！」

女子達の悲鳴。全員が一目散にドアから教室の外へと逃げていく。
みんな必死の形相だ。

それもそのはず。今入ってきたあの人は、くたびれたジャージに
ぼさぼさの髪、マスクにサングラスという出で立ちで、どこからど
う見ても不審者だ。

もちろん俺だって逃げた。こんなところで命を落としたりしたら
後悔することが山ほどある。

みんなと一緒に下駄箱を突っ切って、上履きのままグラウンドに
出る。ここまで来ればもう安全だろう。

俺はひとまず胸をなで下ろした。それから、あることに気付いた。
高宮がいない。

・・・まさか、人質に取られた？
え？もうあの世へ召されたとか？

高宮瞬、君のことは忘れないよ。どうか八つ当たりで俺のことを
呪い殺さないでください・・・

と、十字を切っていた俺の耳に死んだ高宮の声が聞こえてきた。
見ると、昇降口の辺りで困り果てている高宮がこっちに何か叫ん
でいるようだった。

「おーい、みんなー、なにやってんだよー。」

げっ、出た。さっきあんだけお祈りしてたのに。

「早く戻って来いよー。先生困ってるからー。」

高宮が手招きしてきた。頼むからそんなことしないでくれ。クラスメイトを道連れにするなんて・・・

って、え？今、先生って言ったか？

せんせいって、ティーチャーの先生だよな。とすると、さっきの不審者は・・・

「なにやっつてんだお前ら！さっさと教室戻れ！」

窓から顔を出したのは隣のクラスの木田先生。

「だって、先生、不審者が・・・。」

誰かがこの恐怖を訴えた。でも、それを木田先生は笑い飛ばした。「ははっ、あの先生か。マスクにサングラスの。そうか、今日からだったか。大丈夫だ、あの人は先生だ。今日からお前らの新しい担任だ。」

「・・・・・・・・・・。」

一瞬の静寂の後、

「えーっ！」

グラウンド中を恐怖と絶望、ちよっぴりの好奇心が駆け巡った。

そんなこんなで、全員が教室に戻った頃には、もうホームルームの時間は終わっていた。

「えー、時間もなしめんどくさいので自己紹介は名前だけにします。」

新しくこのクラスの担任になった伏見良平ふしみりょうへいです。

えー、不審者じゃないんで、仲良くしてやってください。

はい、それじゃホームルーム終わり。みんな練習頑張れよー。」

それだけを言っただけで教室のドアを開けようとした妙な先生に、クラス中が噛みついた。

「ちよつと待てよ。何で黒田先生はいなくなっただんだよ！」

「そうだ、そうだ。ちゃんと説明しろ！」

「練習とか、どうでもいいからホームルーム続けてよ！」

「そうだ、自己紹介からやり直せ！」

もう大変なことになっていた。基本真面目な一年生の俺たちが敬語まで忘れるほどに。

さすがにこの状況を放って置いてはいけないと判断したのか、妙な先生は開けかけたドアを閉め、もう一度教壇に戻った。

「おーい、静かにしろー。わかった。ホームルームを再開する。」
クラス中の野次がピタッと止まった。

「これからいろいろ説明するから、質問のある奴は手エ挙げてから話せよー。あと正しい言葉遣いな。はい、じゃあ、さっきやりなおせて言われたんで自己紹介から。新しくこのクラスの担任になった伏見良平です。みんな、仲良くしてください。」

「黒川先生はどうしたんですか。」
早速誰かが質問した。

「手エ挙げるつつただろ。前の担任は昨日交通事故に遭われて入

院しています。あと、黒川じゃなくて、黒田な。」

「入院？」「マジで？」ざわざわと話し声が広がる。

しかし、それも誰かの質問でかき消えた。

「じゃあ何でいきなり見たこともない先生が来てるんですか。」

「だから手エ拳げろって。俺も正直びつくりしてる。ここまで対応が早いのはちよつとおかしいので、何か裏の事情が絡んでるんだと思います。黒川先生はもう戻ってこないと思つた方が いいですよ。」

「先生、黒田です。あと、教師がそんなこと言つちやっつていいんですか。」

「黙りなさい。」

もともと低めの先生の声が更にワントーン低くなった。

それにしても・・・俺は思つた。

この人、おかしいのはその格好だけじゃないみたいだ。

なんだこの口を動かす労力すらもつたみたいないなダルそうなしゃべり方は。それに、いろいろとヤバイことを平気でしゃべる。

少なくとも俺はこんな教師、見たことがなかった。

「はい、先生、質問です。」

誰かが律儀に手を挙げた。

「お、君、偉いねー。よし、今度テストの点を五点上げといてあげようかな。」

・・・本当にやりそうで怖い。

「何でマスクとサングラスをつけてるんですか。」

うん、そこはかなり気になるところだ。

みんなが次の言葉に集中する。

先生は言つた。

「俺がかつこよすぎるからです。」

『・・・・・・・・』

教室をおかしな空気が支配した。つつこむ余裕もない。

先生が続ける。

「この学校に赴任することになって、俺は思った。この美貌をそのままさらけ出していたら、女子生徒全員に一目惚れされる。それは教師として本意ではない。じゃあ、顔を隠せばいいんだ、と。」

安心しろ、校長にも許可を取ってある。まあ、顔は隠していても、にじみ出てくる魅力とかあるから、みんなひっかかるんじゃないぞ。あーあ、こんなに長引いた。他に質問ないな。はい、じゃあホームルーム終わりにします。きょーつけ、れい。ありがとうございました。」

妙な先生はそのまま行ってしまった。

教室の空気は変わらず、みんな呆然と先生が出て行ったドアに焦点の定まらない目を向けていた。

「なあ、切磋琢磨。僕ら、あんな担任でこの先やってけるのかな。」
後ろの席から高宮が声をかけてきた。

「僕、学級委員だろ。今日職員室まで先生を迎えに行くように言われてたんだ。」

だからグラウンドにいなかったのか。あの人が担任だって知ってたから。

「職員室に入ったら、なんかいつもと違うんだ。雰囲気が出るって言うか、今まで重苦しい空気しかなかったのに。なあ、どう思う？ やっぱりあの人の影響かな。」

「その明るい空気をあの妙な先生が作ってるんだとしたら、ただ者じゃない。新しく赴任してきた教師がそんなに簡単に空気を変えることはできないはずだ。ましてやそこが職員室。生徒の目がないから教師同士が無理して仲良くする必要もない。」

「じゃあ、あれは信用するか？ マスクとサングラスの理由。」

「理由はどうか知らないけど、校長の許可は嘘じゃないと思う。じやなきやあんな格好、許されるわけがない。」

「そうか。これから、どうなるんだろうな。」

高宮のその言葉の直後、授業終了のチャイムが鳴った。

夏休み二日目。俺はやつぱり学校に行った。

そろそろ気になる人のために説明しておこう。

この学校にはおかしな伝統がある。夏休みの間に球技大会を開催するのだ。

それに伴い、球技大会までの夏休みは生徒達の自主的な意欲による練習が認められている。是非ともクラスで一致団結し、勝利を掴み取ろうではないか！という熱い生徒が登校し、十五分のホームルームと二時間の練習を行って帰宅する。

しかし、世の中にはいろいろな人がいる。誰もがみんな行事に燃えるわけではない。でも、そうはいつてもこの球技大会にはクラス対抗の種目もあるから、結局やる気のない連中も駆り出されるといのが現状だ。

俺？やる気などないに決まってる。ただでさえ熱いこんな季節にみんなで燃える意味がわからない。

切磋琢磨は「やる気がない」の代名詞だ。

さて、これからホームルームが始まるうとしていいる。どういいうわけかクラス担任はまだやってきていないようだった。

生徒達の自主的な意欲？そんなの関係ねえ！とばかりに隣のクラスからは木田先生の叱咤激励が聞こえてくる。

それに比べてこのクラスには、どういうわけか火付け役がない。全員、周りの奴が行ってるから行かなきゃいけないのかな、みたいな感じで登校しているのだ。

こういいう時は、担任が先頭に立ってやる気を奮い立たせたりするのだが、そんなことは期待できそうになかった。何しろあの人だ。

しかし、それは大きな見込み違いだったことに、後々気付かされることになる。

「おい、お前ら、よく聞け！この球技大会、絶対優勝しろよ！負けたら許さないからな！！」

遅刻して教室に入るなり叫びだした伏見先生に、やはりクラスは啞然とした。

そりゃそうだ。昨日とはまるで別人のような熱血教師がそこに立っているんだから。

「いや、優勝なんて贅沢は言わない。せめて隣のB組にだけは勝ってくれ。実は昨日、隣の木田君とちよつとした賭けをした。これに負けるとヤバイことになるんだ。頼む！頼むから勝ってくれ。みんな！」

伏見先生はもう両手をこすって拝みだしている。

でも、それってあんたの都合でしょ？

誰もが必死に拝む先生を冷ややかな目で見つめる。

そんな気配を察したのか、先生がピタッと拝むのをやめ、がさりと教卓の中から大きな紙を引っ張り出した。

ばんつ、と紙を黒板に叩きつけた音にみんなが一瞬びくつとなる。

そこにはこんなことが書かれていた。

「席替えドキドキ大作戦！ファインプレーはだあーれだ？」

・・・えっと、俺たちに何をしろ、と？

「席替えドキドキ大作戦！ファインプレーはだぁーれだ？」

・・・えつと、俺たちに何をしろ、と？

紙の四隅をマグネットで止め、腕を組み教室を歩き回る先生。

「いいか、俺がいくら頼んでも冷酷なお前らは頑張らないと思って、こんなプランを考えておいた。この球技大会の後、席替えを行う。ただし、ただの席替えじゃない。これからルールを説明するから、よく聞いとけよ。」

そして先生の説明が始まった。

「まず、俺の独断によつてこのクラス全員の球技大会貢献ランキングを作る。そして、ランキング上位の者から好きな席を選んで座っていくわけだ。しかし、これは席替えドキドキ大作戦だ。ドキドキしなけりや意味がない。だからこのルールにアレンジを加える。まず、女子がランキングに従つて席を決める。次に男子がその座席表を見てランキング通りに席を選ぶ。全部決まったらご対面だ。女子のみんなは、ここで『えー』とか『うひゃ』とかなるはずだ。『うひゃ』な人はいいが、隣の席が『えー』だった女子は、かわいそうなので席の交換を認める。ただし、条件がある。隣の『えー』な男子のランキングが自分より低いこと。それから、交換する相手の女子のランキングが自分より低いこと。以上だ。みんなわかったと思うが、この席替えは貢献ランキングが全てを左右する。つまり、良い席も悪い席もお前らの努力次第ということだ。くれぐれも男子諸君、球技大会でかっこいい姿を女子の目に焼き付けておいた方がいいぞ。『えー』とか思われないうちにな！」

先生は言うだけ言つて、笑いながら教室を出て行った。

なんだこれ、これが教師のやることか？

俺はもう呆れを通り越し、感心の域に達していた。

この後、俺たちが目の色を変えて練習を始めたことは言うまでもない。

そして、担任のあだ名がフツシンに決まった。

伏見だからではない。不審者のフツシンだ。満場一致でこの案が通った。

練習終了のチャイムがやかましく鳴り響き、グラウンドや体育館や廊下を行き交っていたありとあらゆるボールの動きがピタッと止まった。

俺達はその場に崩れ落ちた。もう限界だった。足に力が入らない。腕は少しも動かない。

そう、俺達は決死の思いで練習しているのだ。気になるあの子の隣に座るために。

その強い思いがサッカーボールに命を吹き込み、グラウンドをマツハのスピードで駆け抜けさせた。

きっと体育館では女子のバスケットボールがマツハでジャンプしていたことだろう。

今の俺達は、優勝を目指して頑張っているようなクラスよりよっぽど強い。目先の欲のために普段では考えられないようなパワーを出せるのだ。

やる気がないなどと言っている場合ではない。クラスのためではなく、自分のために戦わなければならないからだ。同じクラスの仲間達は、むしろ蹴落とさなければいけない敵なのだ。そんな意識が根付いたこのクラスには気を抜く奴など一人もいなかった。

もちろん、俺も含めて。

実は、入学してから高宮とは違う意味でもう一人、興味を持った人がいたのだ。

ふじのしもか
藤野友香。

決しておしゃべりなわけではなく、かといって寡黙なわけでもない。

女子達のグループ分けでどこにも属さない唯一の人だ。でも、仲間外れにされているのでもない。昨日はあっちにいたと思ったたら今

日はそつちのグループにいる。ふと気付いたら一人でふらつとどこかへ行っている。

ちよつとカールさせてみたり、色をつけてみたりして、流行の髪型を追いかける他の女子達と違い、背中まである真つ直ぐな黒髪をそのまま垂らしている彼女は少しミステリアスな雰囲気を持っていた。

それは、周りに流されない強い信念の象徴のようにも見えた。

実際、その髪型は大きくて印象的な目や高く通った鼻を持つ彼女の顔によく似合っていた。

ある日の授業中、俺は窓際の藤野を何となく眺めていた。

開け放した窓から入ってくる風に髪を遊ばせながらぼんやりと外を見ている藤野。どこか遠くの方を見つめながら、何かを考えているような彼女の視線。そのどこか大人びた仕草に、俺はやられてしまったのだ。

我ながら単純な奴だと思う。たったそれだけのことで好きになっってしまうなんて。一目惚れなんて絶対にしないと自負していたのだが、これじゃほとんど一目惚れじゃないか。

でもまあ、好きになってしまったものは仕方ない。窓の外を見つめる横顔をもつと近くで見たいと思うのが人間の心理ってものだ。

だから俺は勇気を出した。プライドもちよつと投げ捨てた。

「高宮、サッカー、教えてくれよ。」

練習が終わり、帰りの支度をしていた高宮に、思い切つて声をかけたのだ。

「高宮、サッカー、教えてくれよ。」

高宮は一瞬、こいつは何語をしゃべっているんだとでも言いたげな表情をしていたが、やっと意味を理解したのか、大げさな程に驚いた。

「は！？僕が？君に？サッカーを教えるのか！？」

「そうだ。」

「なぜ？」

「なぜって、別に良いだろ。」

「あ、わかった。わかったぞ。」

高宮が滅多に見せない表情を浮かべた。唇がおかしな形につり上がり、目がキュツと細くなる。

「誰かの隣、狙ってるのか？」

「……………」

「凶星だな。」

まったく、だから秀才は嫌なんだ。

俺はもう開き直すことにした。

「そうだよ。だから必死こいて練習しなきゃなんねえんだよ。いいだろ、ちよつと教えるくらい。」

「ははっ、君が必死になるなんて思わなかったよ。」

そう言っつて高宮は、ロツカーからサッカーボールを取り出し、俺の方へ投げてよこした。

流れるように、鮮やかな動きだった。

「しょうがないな。じゃあ教えてあげよう。」

俺が初めて見る高宮の笑顔がそこにあつた。

それは、無理して貼り付かせた偽物の笑いで、人を見下す嘲笑いでもなかった。

心の底から、本当に楽しそうに笑ったのだ。

「おい、ここ、女子トイレだろ？」

「そうだけど。」

「ふざけんな。俺は絶対入らない。」

「だから、ここしか入口はないんだって。」

「嫌だ！俺、屋上の方から行く。」

「骨折どころじゃ済まないと思うけど……。」

俺達は、一階女子トイレの前でサッカーボール片手に立ち往生という、妙な時間を過ごしていた。

下校時間をとくに過ぎている今、グラウンドで堂々と練習するわけにもいかず、アリジゴクなら大丈夫だと言った高宮に付いて来たのだが、女子トイレに入るなどという高いハードルを俺がなかなか越えられないでいるのだ。

「どうせ誰もいないんだから、入ったって何の問題もないだろ。」

「大ありだ。俺はこの先ずっと女子トイレに入ったという事実を背負って生きていかなきゃならないんだからな。」

「そんな、大げさな……。」

「だいたいな、高宮」

誰かの足音。

はっとして言葉を途切る。俺の口は「や」の形に開いたまま固まった。

足音が近付いて来る。

「おい、誰かいんのかー。」

すぐ側の曲がり角の向こうから声が聞こえた。

俺達は顔を見合わせた。そして、一目散に近くの物陰に隠れる。

そこは、女子トイレだった。断じて言う。そこしかなかったんだ。

俺達は一番奥の個室に体を滑り込ませ、息を殺して足音が通り過ぎるのを待った。

しかし、それはどんどん大きくなっていく一方だった。少しずつ大きくなる足音と比例して俺の心拍数が上がっていく。まずい。角を曲がられた。足音が格段に大きくなる。

そして、

「お前ら、何やってんの。」

クラス担任、伏見良平、通称フツシンの目には、女子トイレの一つの個室に二人で入り、なぜかサッカーボールを持っている男子生徒達が映っていた。

ああ、やっぱりドアは閉めておくべきだった。目の前にマスクとサングラスを見たとき、俺は思った。

「何、やってんの。」

再びフツシンが聞いてくる。俺達は石像のように動かない。

何と答えればいいのか全く分からない。この状況で、どう返事するのが正解なんだ。誰でもいいから教えてくれ！

頭の中はパニックを起こしかけていたけれど、口はわずかも動かなかった。

サングラスの奥の目がじっとこっちを見据えている。

くたびれたジャージのポケットに両手をつ込み、背筋は曲がり、片足重心。覇気の欠片もないはずの教師の前で、俺ばかりか、高宮までもが動けない。

なんだこの緊張感は。

フツシンが溜息をついた。緊張が一気に解ける。

「もういいや、面倒くさい。ほら、早く出てこいよ。俺に変態のレッテル貼られる前に。」

急に緩みだした空気に少しばかり安心した俺達は、何とか個室から出ることができた。

「あのな、練習すんのはいい。いや、本当はこんな時間にやつちやいけないんだけど、いい。むしろ奨励する。ガンガン練習しろ。ただし、周りに気付かれちゃおしまいだからな。お前らは長い説教を聞くハメになる。俺は職員室でお前らを説教する役を買って出るハ

メになる。お互いに良いことなんてなんもない。だから、やるならもうちょいコソコソやれ。さっきみたいに大声で女子トイレ侵入作戦なんて立ててたら、すぐバレるからな。言っとくけどあれ、廊下中に響いてたから。」

「げっ、丸聞こえかよ。どつりで一直線に足音が近付いてきたわけだ。」

「あ、それから切磋琢磨。そのポケットに入ってるモン、明日から持って来るんじゃないぞ。さすがに俺も、スルーできなくなるからお前は使ったりしないんだろうけど、もし誰かに見つかった時、後の責任問題が面倒だから。」

「今までの流れと全く同じ調子で言ったフツシンのこの言葉で俺は凍り付いた。」

8 (前書き)

夏の章最終話です。

「そのポケットに入ってるモン、明日から持って来るんじゃないぞ。」
「
今までの流れと全く同じ調子で言ったフツシンのこの言葉で俺は凍り付いた。

そう、この左ポケット。身に覚えがないわけではなかった。

制服の堅苦しさに守られて細長い膨らみはほとんど分からなくなつてはいるが、この左ポケットには一本、抜き身のタバコが入っていた。

もちろん吸うためではない。そのうち一回くらい試してみようと思つてはいるが。

俺は逃げ道が欲しかった。

当たり前のように学校という場所に押し込められて、出来上がった知識を詰め込まされる。感情を押しつけられ、みんなと同じ分身になりすます日々。

そんな中で、逃げ道を作っておかなければ耐えられなかった。

タバコは近所の自販機にたまに取り忘れがあるから、人目を盗んで手を突っ込めば簡単に手に入った。

教師にバレたこともなかった。

基本、教師というものは生徒を型にはめて考える。この生徒は優等生、この生徒は不良要素を多く含む、というようにある程度の種類がある型に生徒を当てはめて、まずそこから物事を見て、考えるのだ。

俺は今のところノーマークだ。優等生要素も不良要素も持ち合わせない「月並み型」。つまり誰も、俺のことを見張る教師はいないということ。ポケットが細長くふくらんでいても目を懲らしてよく確かめようとはしない。

型にはめてある安心感がその目に曇りガラスを被せているのだ。

そう思っていた。しかし、曇っていたのは俺の目も同じかもしれない。危うく、この人を「教師」という型にはめるところだった。人のことなんて言えたもんじゃない。

俺は、自分で創り出した「教師」という型にいろいろな人を当てはめてきたのだ。それがやっとわかった。

フツシンは、タバコに気が付いた。ちゃんと見えていたのだ。

俺という人間を大まかな、そして間違った型なんかにはめるんじゃない、切磋琢磨というただ一人の生徒として見ることが出来る人。そのサングラスの奥の目は、どこまで透き通った視野を持っているんだ。

この時から、俺にとってフツシンは得体の知れないものになった。それはまるで、未知の生物宇宙人。

もうタバコは必要ないな。

俺はさっきまで入っていた個室に戻り、タバコをトイレの水に流した。

渦を巻きながら沈んでいく白い棒を見届ける。

いつの間にかフツシンはいなくなっていて、高宮と二人だけの女子トイレに水の流れる音がしばらく続いた。

高宮は、俺がいきなりタバコなんて出して、トイレに流したりしたもんだから

かなりぎよっとしていたけれど、何も言わずに俺の儀式が終わるのを待っていた。

そう、俺は新しい逃げ道を見つけたんだ。フツシンという、わけの分からない教師の中に。

あの人という存在そのものが、逃げ道なのだ。タバコなんかよりずっと上等の。

「行こうぜ高宮。サッカー、教えてくれるんだろ？」

「ああ、僕、かなりスパルタだから。ちゃんと付いて来いよ？」
勢いよく流れる水の音が清々しかった。

8 (後書き)

タバコはトイレに流しちゃいけません。(笑)

秋の章 1

太陽の表面に浮き上がる赤い炎のことを「プロミネンス」と言う
そうだ。

あちこちに出現し、怪しい動きをするらしい。

秋の章（九月一日、月曜日、晴れ）

始業式の朝、教室に入ると目に飛び込んでくる二枚の紙があった。
黒板にマグネットで貼ってあるそれ、一枚は賞状。学校優勝の。
そう、俺達は夏休みの球技大会で、狙っていた学年優勝のもつと上、
二、三年生を差し置いて学校優勝を取ってしまったのだ。なにしろ、
全校トーナメント戦である男子サッカー、女子サッカー、男子バス
ケ、女子バスケット、男女混合ドッジボールの全ての種目で一位か二位
を取ったクラスなんて、他になかった。

しかし、みんなが集まり、血眼になって凝視していた紙は、もう
一枚の方だった。

『球技大会貢献ランキング』その文字を認識した瞬間、俺は机や
椅子を蹴散らして、黒板まで駆け寄った。人混みを掻き分けて紙の
真ん前に陣取る。

これだ。この結果で席替えが決まる。俺のハッピースクールライ
フはこれにかかっているんだ！！ 思い返せば、高宮に声を掛け
てから大会当日まで、俺は本当に頑張った。今まで生きてきてこれ
程何かを頑張ったことはないくらいだ。

高宮はサッカーだけでなく、俺がエントリしていた種目全てを
教えてくれた。サッカーも、バスケットも、ドッジボールも、テニスも、
廊下ボーリングも、剣玉も、高宮はやっぱり上手だったし、教え方
も最高にうまかった。高宮が何年もかけて編み出した、一番効率の

良い方法を伝授してくれたのだ。

さらに、観戦している女子達やフッシンにアピールするための小技まで教えてくれた。試合中、チラッと見せるテクニックが、その人をやたら格好良くさせるらしい。

おかげで一週間の間にヘディングシュートも、スーパースピードドリブルもできるようになった。

そして、俺は二時間の合同練習と、アリジゴクでのスパルタレッスンでどんどん力をつけていった。

本番だつてなかなかよかった。できる小技は全部使ったし、個人種目はテニスも廊下ボーリングも剣玉も全部五位以内で入賞している。

よし、大丈夫だ。高宮には負けたけど、五位以内には入っているはず！

意を決して顔を上げる。

貢献ランキングの上位三人が真っ先に目に飛び込んできた。

- 一位 高宮瞬
- 二位 藤野友香
- 三位 切磋琢磨

よっし！三位。三位だ！この俺が、三位！

神様、仏様、高宮様ありがとう。伏見大先生ありがとう。そして、頑張った俺におめでとう！

この際、藤野の二位には目をつぶろう。とにかく万歳！

と、心の中では紙吹雪の中でガッツポーズしながらバック転している俺も、さすがにそれを実行しようなどというバカなことは考えない。いや、ガッツポーズしながらバック転なんてどうやってやるんだ。

まあ、つまりそんなに喜んではいけないということだ。度が過ぎると周りに睨まれることになる。「あ！やった！」くらいが丁度良

い。

俺は自然にニヤけてしまう顔を我慢しつつ「あ！やった！」というそれだけの言葉に喜びと優越感を込めた。

しかし、この我慢はただの無駄な労力にしかならなかった。

なぜなら、周りにいる連中が、俺のことなど全く気にしていないからだ。

もし、今俺が貧血で倒れたとしても、きっと誰にも気付いてもらえないだろう。

決して、俺の影が薄すぎるからではない。みんなの意識が別の所に向いているからだ。

黒板に集まった十数組の目は、どれもある一点を凝視していた。

それは、長い名前の羅列の一番下、つまりランキング最下位の間だった。見たこともない名前がそこにあっただのだ。

「球技大会に貢献してない知らない人っていつたら、転校生かな。」

いつの間に登校してきたのか、気付いたら高宮が隣にいた。やはり、最下位の名前を凝視している。

すかさず周りが返事を返す。

「あ、高宮、おはよう。」

「お前やつぱり頭良いな。転校生とか、考えもしなかったよ。」

「こんな時期に転校生？まだ中学始まって五ヶ月しか経ってないぜ？ありえないだろ。」

あつという間に、人だかりは黒板の前から高宮の周りへと移動していく。もちろん、俺も巻き込まれた。

これが太陽の引力か。いつものことながら感心する。

それから五分間、謎の名前について議論した結果、それは転校生であり、こんな時期に転校してくるのだから何か訳ありなのだろう、ということになった。

秋の章1（後書き）

中1の二学期に転校するのが珍しいことなのかどうかは、
正直よく分かりません

神宮司影。転校生はそんな名前だった。

ガラガラ。教室のドアが開きフツシンが入ってくる。その後から続いて入ってくる転校生。

クラスの期待値は最高に高まっている。教室の空気は張り詰めていた。

転校生の全身がドアから現れた。その瞬間、クラス中の誰もが目を見開き、椅子に座っている体を五センチ程前に乗り出した。

俺でさえ、息を飲んだ。

とんでもない美少年がそこにいたのだ。

「このクラスに転校生が来ることになりました！。もうランキングに載せたから名前は知ってるな！。はい、じゃー一言。」

転校生が頭を下げる。前髪がサラツと動いた。

「よろしくお願いします。」

「よし。じゃ、これから席替えの説明を始める。一時間目は数学で俺の授業だから、そこを使うことにした。授業中なんだからギャース力騒ぐんじゃねーぞ。以上、解散。」

それだけ言っただけで出て行ってしまふフツシン。この人はいつも逃げるように教室から出て行こうとする。

後には、置いて行かれた後味の悪さと、一人教壇に立ったままの転校生が残された。

気まずい空気がしばらくの間教室を漂い、休み時間の開始を告げるチャイムが鳴るまで誰一人として動こうとはしなかった。

チャイムが鳴り響き、止まっていた時間が動き出す。

男子は弾かれたように転校生を取り囲み、質問の嵐を巻き起こしていた。

女子はいつものグループで集まって、ペチャクチャしゃべり出した。

俺はもちろん、観察だ。席に座って転校生やクラスの様子を眺めている。そして、なぜか高宮も俺の後ろの席に座ったままだった。

「転校生の方、行かないのか？」

俺が聞くと、高宮は微笑んだ。

「最近気付いたんだ。君がいつも遠くからクラスを眺めている理由、近くで話を聞くより、遠くから全体を見渡した方がたくさん情報を掴めることもあるってね。」

とつとう高宮も観察を知ってしまったらしい。

俺は少し試してみることにした。

「なあ、このクラスの女子ってちょっと変わってると思わないか。「なんで？」

「だって転校生がああ顔だけ？女子がほっとくはずないだろ？なに、あつちの方を見ようともしない。」

「確かに。」

考え込む高宮。しかし、すぐに何か思いついたようだ。

「よく見るよ、女子のグループの位置。みんな黒板の近くに集まっている。それに会話の内容。ちょっと聞いてみてくれ。」

俺は言われた通り、近くのグループの話に耳を傾けた。

「ねえ知ってるー？駅前コンビニ、潰れて駐車場になるんだって。」

「あー知ってる知ってる。リエの妹、駐車場で誘拐されそうになっただんでしょ。」

「そうそう、駐車場って言えばさー、駅前のコンビニ、潰れて駐車場になるんでしょ。」

・・・なるほど。いつも以上に支離滅裂だ。

高宮が言った。

「つまり、みんな興味はあるんだよ。だから耳は男子のする質問に向いている。会話なんてあってないようなものだね。」

そう、このクラスの子はおそらくシャイガールだ。興味はあるけどガンガン質問するのは恥ずかしいし、かつこ悪いことだと思っているのだ。素直じゃない。

俺は正直驚いた。こいつ、なかなかいい観察眼を持っている。

うん、意見を交わす価値はありそうだ。俺は高宮に聞いた。

「じゃあ、あの転校生、どう思う?」

「え?どう思うって・・・まあ、顔はすごいよね。」

「他には?」

「うーん・・・特に変わったところはないな。あ、ちょっと無口かもしれない。でも、転校初日だから当然か。」

やっぱり高宮は気付いていないみたいだった。転校生の方へ目を向けたまま考え込んでいる。

教壇ではテンポの良い質疑応答が繰り返されていた。

「名前、なんて読むの?」

「じんぐうじかげる。」

「珍しい名前だな。カゲルって。」

「兄ちゃんがカケルだから。」

「え、兄ちゃんいるの?何歳?」

「21。」

「おー、離れてるな。他に兄弟とかいるのか?」

「いない。」

確かに答え方は素っ気ない。でも、次々と飛び出す質問を一つ一つちゃんと拾っているのは見事だ。

後ろを振り返る。高宮はまだ考え込んでいた。

まあ、仕方ない。俺は答えを教えることにした。

「なあ、転校生の発音、よく聞いてみる。『ち』とか『し』がch iとsh iになってるだろ。」

高宮が黙り込んだ。耳に神経を集中させているらしい。

「あ、ほんとだ。」

気付いたようだ。あと一押しといったところか。

「それから、アメリカの新学期は九月からなんだ。」

「じゃあ・・・あの転校生って、帰国子女なのか？」

高宮が目を見張った時だった。

「せいかわい。よくわかったね。」

いきなり上から声が降ってきた。ギクリ、と一瞬固まる。

それは、まさに俺が今言おうとしていた言葉だった。

俺と高宮はおそろおそろ顔を上げ、声の主の方を見上げる。

「ねえ、君たち、おもしろいね。俺も仲間に入れてくれない？」

見たこともない程きれいな顔が、そう言っで見下ろしていた。

いつの間に質問の嵐を抜け出してきたのか、転校生は近付いてくる気配さえ感じさせなかった。

その時、チャイムが鳴った。休み時間終了だ。

全員がわらわらと自分の席に戻っていく。

転校生の席は用意されていないのでは、と俺は心配したが、あいつはもともと空いていた高宮の隣に悠然と腰掛けていた。

2 (後書き)

アメリカの学校の新学期が本当に9月かどうかは
正直知りません。

確かめるのもめんどくさいんで・・・
でも、どっかで聞いたことがあります。

とつとつ席替えが始まった。

今、女子達が教室で席を決め、座席表を作っている最中だ。邪魔な男子は追い出され、体育の授業のため空いていた隣のクラスで待機している。

転校生が、近くの席に腰掛けながら言ってきた。

「ねえ、仲間に入れてくれるの？くれないの？」

長い足を見せつけるように組んだ。その目は挑むようにこちらを見据えている。

俺はコソコソと高宮に耳打ちした。

「おい、何だよあいつ。何が『ちよつと無口かもしれない』だ。俺はあんなに馴れ馴れしい転校生なんて見たこともない。」

「じゃあどうするんだよ。仲間に入れてやらないのか？」

「・・・そんなこと言っていないだろ。でも・・・」

「だってあつちから声かけてきたんだし、断るわけにもいかないんじゃないか？」

・・・確かに。「仲良くしようと言ってきた転校生を追い払うの図」というのは見栄えがよろしくない。

俺は渋々承諾し、転校生に向き直った。

「わかった。別に俺達、仲間だったわけじゃないんだけど、まあ、

三人で仲良くしてごうか。」

「本当に!？」

転校生の表情がぱつと輝いた。組んでいた足を解き、机から立ち上がった。

「俺は神宮司影。よろしく。」

そう言って手を差し出す。

俺は最初、こいつが何をしたいのかわからなかったが、しばらく

して握手を求めているのだと気付き、慌ててその手を握った。

「ああ、俺は切磋琢磨で、こいつが高宮瞬。よろしくな。」

自己紹介で握手なんて、なかなか古風な奴だ。いや、もしかしたらこれはアメリカ仕込みかもしれない。

突然、前のドアが開いた。

「よーっしお前らー、座席表できたぞー。」

手に持っていた紙をヒラヒラさせながらフツシンが入ってきた。

どうやら、女子の席決めが終わったらしい。

隣のクラスのマグネットを勝手に使って、フツシンが座席表を黒板に貼った。

すぐに男子全員が駆け寄っていく。それはもう、すさまじい勢いだった。バーゲンに飛びつくおばちゃん並みだ。

俺はただ一人、藤野友香の名前を探した。

藤野友香・・・藤野友香・・・あつた！

そこは一番後ろの窓際の席。一番人気のS席だ。

やった。やつぱり思ったとおりだ。藤野は窓際が好きなんだ。これで俺は毎日のようにあの横顔を眺めていられる！よっしゃー！！もちろん心の中で、俺は喜びの叫びを上げながら、宙返りしていた。

「はい、じゃあランキング順に席決めろー。最初は高宮からだな。

おい、どこが良いんだ？」

「えーっと、じゃあ窓際の一番後ろ、藤野さんの隣がいいです。」

・・・え？

心の中で宙返りしていた俺が空中で静止し、頭から落っこちた。

心の中の俺はそのまま気を失った。

・・・高宮君？今、何て言いました？

3 (後書き)

アメリカの学校の新学期は九月からであっていたようです。
ちゃんと調べましたよ。

「あー、そこ俺もいなくなつて思つてたのに。」

周りで数人が気を落とした。ライバルは結構いたようだ。

いや、待て。高宮がそこを選んだと言うことは・・・まさか、あんたもライバル!?

俺にいろいろ教えていながら、実は高宮も狙つてたのか?

何か、裏切られた気分だ。いや、俺がこの席を狙っていることを高宮に言つてあつたわけじゃないんだが。

ああ、こんなことなら恥ずかしがらずに言つとけばよかった。

「おい、どうした切磋琢磨。早く席決めろー。後ろがつつかえてんだろーが。」

フツシンに促されたが、もう席なんてどこでもよかった。藤野の隣に座れなきゃ、三位なんて何の価値もない。

脱力しきつた俺は、無意識のうちに席を選んでた。世の中はなんて冷たく、厳しいものなんだろー、そんなことを考えていた。

「うわー、そこ一番狙つてたのに。」

「おいおい、切磋琢磨なんか取られてたまるかよ。」

たくさんの溜息と残念がる声で俺は我に返つた。

周りを見回すと、半分以上の男子が肩を落とし、こちらを睨んでいた。多少殺気のコもつた目もあった。

・・・もしかして、俺・・・

おそろおそろ視線を座席表へと向けた。

切磋琢磨の四文字は窓際の後ろから二番目、高宮の前の席にあつた。

深層心理の専門家ではないが、少しでも藤野の近くにいたいという意識が無意識のうちに働いていたと思われる。

まあ、それはいい。しかし、問題は別の所にある。

俺の隣の女子、これが原因だった。

彼女は、どこかで密かにファンクラブが立ち上がっている程、男子からの絶大なる人気を保持していたのだ。

確かに、ぱっちり大きく可愛らしい目や小さい顔は、テレビに出てくるアイドルみたいだし、百五十センチもないであろう身長が小動物のようでまた可愛らしい。

半分以上の男子が俺に向けてくる視線も分からないでもない。

でも俺は正直、そっちはどうでもいいのだ。人気ナンバーワンの女子の隣に座ったからって、ちつとも嬉しくない。

わるいな、この席を狙った男子諸君。俺は君達程この席を楽しめそうにない。でも、この席を譲る気はないんだ。許してくれ。

口で言うとは大変なことになるから、ようやく目を覚ました心の中の俺に謝らせた。

順番はどんどん回っていき、席が埋まっていった。

中盤辺りからは、目欲しい席を全て取られてしまったのか、みんな隣の女子などお構いなしに、席の位置だけを判断材料としていた。まあ、誰でも考えることは同じだ。席はきれいに後ろから埋まっていった。

そして、最後に残された席、最前列のど真ん中。そこは密かに「お見合い席」と呼ばれていた。そこに座ると、まさに先生と一対一で話しているような錯覚に陥るらしい。らしい、というのは、俺は運のいいことにそこにまだ座ったことがないからだ。

「神宮司、お前は自動的にこの席になるけど、いいな？」

フツシンが一応確認した。

あいつもかわいそうなもんだ。転校してきたと思ったら、いきなり訳の分からないランキングの最下位にされて、勝手に席を決められているんだから。不満の一つも言いたくなるだろう。

でも、あいつの口から出てきたのは、不満の言葉なんかじゃなかった。

「先生、提案があります。」

影が一步前へ出た。

4 (後書き)

書いてて思ったことがあります。

切磋琢磨ってちょっと気持ち悪いですね。

一途って言えば聞こえはいいですが、ストーリーとかになりそうです。

これからは主役としてもうちちょっとマシに書いていこうかと思えます。

「先生、提案があります。」

影が一步前へ出た。

「あ？何だ？」

「これじゃちよつと物足りないと思うんです。俺みたいに順位の低い人は何のスリルも楽しみありませんでした。これは席替えドタバタ大作戦ですよね。」

「そうだ。」

「全員が最高にドキドキするルールを付け加えてみてはどうでしょう。」

フツシンは少し考えてから言った。

「それは提案する相手が違う。こいつら全員が納得するんだったら勝手にやれ。あー、ちなみに言っとくが、」

フツシンが今度は俺達の方を向いて言った。

「俺はおもしろい席替えを見るのは大好きだ。是非とも実行してもらいたい。」

・・・残念ながらあんたの意見は聞いてない。

影は律儀に頭を下げた。

「ありがとうございます。じゃあ、ルールを説明します。」

影が教卓の向こうに回り込み、全員を見渡した。

「これは『下克上』という新ルールです。この中には狙っていた席を誰かに取られて悔しい思いをしている人がたくさんいるはずですよ。そんな人に一度だけ、チャンスがあるんです。」

落ち込んでいた十数人の顔がぱっと上がった。その中には俺も入っている。

「少し複雑なので例を挙げて説明します。じゃあ、A君とB君とC君がいたとしましょう。B君とC君は、A君の席を狙っています。」

ここで三人がくじを引きます。当たりを引いた人がその席に座れるという訳です。」

その時、数人の生徒が不満げな声を上げた。念願の席を取った奴らだ。

影が「まあまあ、最後まで聞いてください」となだめる。

「確かに。これでは実力で席を勝ち取ったA君がかわいそうです。せっかく大会で頑張ったのにあっさり誰かに席を奪われたら、努力が報われませんから。そこで、A君に特権を与えます。下克上にやってくる人数の三倍、くじを引く回数を増やせるのです。例の三人の場合、B君、C君は一回しかくじを引けません、A君はもともと持っていた一回に加え、下克上してきた二人の三倍で六回もくじを引くことができるのです。A君、B君、C君の当たりくじを引く確率は7：1：1。下克上の人数が多ければ多いほどこの比率の差は大きくなります。圧倒的にA君が有利ということです。でも、B君、C君にも望みはある。」

「じゃあ、もしA君がくじで負けたらどうなるんだ？」

誰かが聞いた。

「もちろん席を譲らなければなりません。そして、当たりくじを引いた人と席を交換するんです。じゃあ、B君が当たりを引いたとしましょう。B君は念願のA君の席に、A君はB君が選んでいた席に、C君は元の席に戻るのです。下克上は一人一回だけ。箱に入れるくじは、そのくじ引きに参加する人のくじを引ける回数合計。そのうち一枚が当たりくじです。例の三人の場合、くじの合計は7+1+1で九枚。当たり一枚、外れ八枚となります。くじを引く順番はA君が決めます。」

影は全員を見回してから言った。

「どうでしょう。このままじゃ心残りのある人がたくさんいるんじゃないですか？下克上、してみませんか？まだ希望はあるんです。」

多数決により影の提案は通った。八割の男子が賛成したのだ。

もちろん、悔しい思いをした奴が多かったのがその理由なのだが、何より彼の話した提案はおもしろかった。

俺の考えるところによると、このおもしろさは、影が話しているから生まれるものらしい。

こちらの考えを実に上手くくみ取り、それに合わせて口調を微妙に変化させる。淀みのない滑らかな説明に潜む揺らが無い自信。

神宮司影。並の中学生じゃない。将来はやり手のセールスマンかプロの詐欺師になれそうだ。

「切磋琢磨、下克上九人の三倍で27回。プラス一で28、と。」
フツシンがネームペンで俺の手の甲に28と書く。くじ引きに参加する人間は、公正を守るために用意されたフツシンという審判によって、手にくじ引きの回数を書かれるのだ。

それにしても・・・なぜネームペンを使うんだ。これ完全に消えるまで一週間はかかるぞ。それもこんなにでかかと・・・。

俺は、自分の手の甲を見た人間が「あの28には何の意味があるんだろう」と頭を悩ませている場面を想像し、溜息をついた。

その時、全員の手の甲に数字を書き終えたフツシンが言った。

「それじゃー、下克上を始める。参加する奴は箱の周りに集まれ！」

準備は整ったようだ。

俺はニヤリと微笑んだ。

目の前には、くじの入った箱と四人の驚愕した表情。

「な、何で君がここにいるんだ。君が引くくじはあつちだろ？」

高宮が一步後ずさりながら、大勢が集まっている方を指差した。その目は他の三人より1.5倍見開かれている。

俺はふつと不敵な笑みを浮かべた。

「A君は下克上しちゃいけないなんて誰が言った？俺が本当に狙ってたのはこの席なんだよ。」

「そ、そんなの反則だ。これじゃ僕の方が不利じゃないか。」

また一步後ずさった高宮が背後の壁にぶつかつた。

「じゃあその手の数字を見てみるよ。しつかり13つて書いてあるだろ。それが反則なんかじゃない証拠だ。審判であるフツシンが下克上の中に俺を入れた。俺の下克上は認められたんだよ。」

「・・・そ、そんな・・・」

高宮が壁を伝つてしゃがみ込んだ。

「悪いな高宮。あんたは13回、俺は28回、確率として俺の方が二倍以上有利だ。でもあんたにも勝算はある。少なくともこの三人よりはな。それに、藤野の順位は俺より上だ。席の交換であんたの隣に行くことだつて考えられる・・・だからそんな目で俺を睨まないでくれよ。頼むから俺に呪いの言葉をぶつけないで。いつものニコニコスマイルはどこ行ったんだよ。もう何でもいいから貼り付かせとけて。怖いから。本当に呪われちゃいそうだから！」

今度は俺が後ずさる番だつた。

普段からは考えられないような憎しみのこもった表情で、じりじりとにじり寄ってくる高宮。その口からは、ありとあらゆる呪詛の言葉がこぼれ出ている。

怖すぎる・・・。

「お、おいどうしたんだよ高宮。いつものお前らしくない。たかが席替えだろ？」

三人がなだめて高宮は少しずつ落ち着いていった。

放出させていた怨念を引っ込め、顔に笑みを戻らせた。なんとか貼り付かせた必死の笑顔は、だいぶ引きつってはいしたが。

「わかった。それじゃあくじ引きを始めよう。」

高宮の震える声で、それは始まったのだった。

俺は本当にひどい奴だ。今は自分でもそう思う。

結果を言っておこうか。当たりくじは俺が引いた。

確率というのは、そう滅多に外れるものではないらしい。世の中、よくできているのだ。

しかし、こんな俺にも後ろめたさはあったようだ。あれからというもの、良心の呵責に苛まれたりしている。

俺は本当にひどい奴だ。

本来、大勢の下克上に対する特権として与えられた27回を別の戦いに使ってしまったんだから。そのせいでまっすぐに頑張ってきた高宮が出し抜かれることになった。

座る席がなくなった高宮は、俺の席を勝ち取った奴が座るはずだった場所に収まった。つまり、なんの価値もない「その他」の席だ。待ち望み、掴み取った席に座れると思ったら、ルール違反すれすれの卑怯な手でいきなりそれを奪われた。ショックは大きかったに違いない。

俺は本当にひどい奴だ。

いろいろと教えてもらった恩を仇で返すなんて。

ああ、俺は本当にひどい奴だ。

・・・このくらいで、許してもらえないだろうか。

俺は十分自分を責めた。これ以上やったら自己暗示にかかって鬱になりそうだ。

俺に謝るといふ選択肢はない。高宮に余計みじめな思いをさせる程、自分は凶太くないはずだ。だからこうするしかなかったんだ。

でも、そろそろやめてもいいんじゃないか？

高宮の姿を目で探す。すると、右斜め五メートルくらい先の所にいつもの疑似笑顔を見つけた。

さすが太陽。立ち直りが速い。俺は安心しながら感心するという妙な心境を味わった。

高宮は、隣の席の女子と親しげに話していた。さつきまで別の席を狙っていたことなんて微塵も感じさせない、完璧な態度だ。

隣の女子も、高宮が自分を選んだだと信じて疑わない様子だ。もちろん女子には下克上の新ルールは説明されていないのだから仕方ないのだが、あそこまで有頂天になることもないだろうに。

そう、高宮はよくモテる。太陽とは、ほぼ例外なくモテるものなのだ。

おそらく、このクラスの女子の三分の一は高宮の隣を狙っているだろう。つまり、これから女子達のバトルが始まるということだ。

そうだ。自分を責めてる場合じゃない。観察だ。これはおもしろいことになる。見逃すなんてもつたいない。

反省モードから観察モードに素早く切り替えた俺は、注意深く教室を見渡すことに意識を集中させた。

・・・はずなのだが。

だめだ。どうにも落ち着かない。

隣の藤野がいつ席の交換を申し出て、高宮の方へいってもおかしくないと思うと、気が気じゃいられない。

せめて高宮のように、楽しい雰囲気を作り上げて、おしゃべりを始めたりできればいいのだが、もうそれどころじゃない。

どうか藤野があっちへ行きませぬように。高宮に取られて赤っ恥をかくのだけは勘弁してください。どうか、神様！

と、心の中でお祈りすることで精一杯だ。

「ねえ、切磋琢磨君。」

「ひぎえっ!？」

だから俺は、いきなり声をかけてきた藤野に、失敗したしゃっくりみたいな返事をしてしまったのだ。

ああ、しまった。何だ今のは。どこから出てくるんだこんな声。俺はもう家に帰りたくなかった。学校なんて燃えて灰になれと思っ

た。
しかい、それらを実行に移さなかったのは、おれが常識ある一般市民だったからではない。

直後、藤野の笑い声が心を潤わせてくれたからだ。

「ははははっ、何、今の声！大丈夫？この世の終わりに直面した力エルみたいな声だったよ。」

そんな力エル見たことあるのかという言葉を飲み込んで、俺は初めて隣に顔を向け、藤野を直視した。

そこには、今まで大袈裟だなあ、と思っていた「花が咲いたように」という表現がぴったりの、極上の笑顔があったのだ。

「私、藤野友香。これからよろしくね。」

「……え？よろしくって、あの……あれのことだよな。そのー、仲良くしよう、みたいな……」

俺はいよいよおかしくなってきたのかも知れない。

藤野が小首を傾げた。

「そうだよ。お隣さんなんだから仲良くするもんでしょ？」

「……え、お隣さんって、じゃあ、藤野、席の交換しないのか？」

「うん。しないよ。私、この場所好きだし。」

「よーっし、きたー！」

この藤野の言葉を聞いた瞬間、心の中の俺は一人でサーカスを始めた。

ピエロの格好をしながら、一輪車に乗りながら、ジャグリングをしながら、タップダンスでリズムを刻むのだ。言わば最高潮の状態である。

もしかして、これって、脈ありってことか？希望はあるんじゃないか？

高宮には悪いが、この席、有効に使わせてもらおうしよう。

「切磋琢磨です。よろしく。」

「ははっ、名前なんかとっくに知ってるって。そんなにかしこまんないでよ。」

「なんだか学校が楽しくなってきた。」

不可解なことがある。

俺の隣には藤野がいて、高宮の隣には、激しいバトルの末、結局女子内ランキング二位が座ることになった。

まあ、そこまではいい。当然の成り行きだ。

しかし、下克上ルールの発案者である神宮司影の席、そこはお見合い席のままだった。影の隣を狙う女子もいたのだが、場所が場所だけにそれ程の人気はないようだった。

そう、彼は自分から提案した下克上をしなかったのだ。

なぜ？自分の席を変えるためにあんなルールを作ったんじゃないのか？

お見合い席に座ることを勝手に決められたのが嫌だったんじゃないのか？

そうでないとしたら、どうして下克上を発案したりしたんだろう。それが彼にどんな影響を与えるっていうんだ。

その答えは、意外なことにあつちの方からやって来た。

席替え後の昼休み、珍しく高宮からサッカーに誘われなかったから、俺は返却期限を恐ろしく過ぎてしまった本を持って図書室に来ていた。

こんな昼休みは久しぶりだ。最近は高宮に引つ張られてクラスメイト達とサッカーボールを追いかけてばかりだった。

今日は声一つかけてこなかった高宮。さすがに腹を立てたんだろうか。

窓の側へ移動して外を眺める。グラウンドを走り回り、今まさにシュートを決めた高宮をすぐに目で捉えることができた。

いつものように光を発散させながら輝いている太陽。コロナで覆

われていなくたって何も変わりはない。

・・・外から見る分には。

「あ、こんなところにいたんだ。」

いきなりの声にはっとして振り返ると、そこには本棚に寄りかかった影がいた。

11 (前書き)

秋の章最終話です。

「あ、こんなところにいたんだ。」

いきなりの声にはっとして振り返ると、そこには本棚に寄りかかっていた影がいた。本当に何の気配もなかったのに。

「高宮とサッカーしてるんだと思ってたよ。」

そう言っつて窓に近付き外を見た。彼の目もまた、太陽を捉えていた。

「外、行かないの？いつもはサッカーしてるんでしょ？」

窓に目を向けたまま問われる。

「・・・誘われなかったから、別にいいんだよ。サッカーだって、そんなに好きって訳でもないし。」

「ふーん。」

彼は相変わらず、窓を見つめたままだ。

しばらくの間、沈黙が続いた。

そして、影が窓から目を離し、こっちを向いてこう言った。

「高宮、相当ご機嫌斜めだね。」

鋭い奴だ。

「ありや斜めどころじゃない。急カーブだ。俺に席を取られたのが悔しくてしょうがねえんだと。」

俺がそう答えたのに、影は何も言わず再び窓の外に目を向けた。

それと同時にゴールへと吸い込まれていくサッカーボール。高宮がまたシュートを決めた。窓ガラスを隔てたこちらにまで、クラスメイト達の歓声が聞こえてくるようだった。

影がふつと笑う。

「あの下克上はね、君へのプレゼントだったんだよ。」

「・・・は？」

俺は驚いて横を向いた。それでも影はグラウンドを見つめたままだった。

「ああ、プレゼントというのは語弊があるかもしれないね。俺は君を試したかった。」

「試す？」

「男子全員にチャンスを与え、宝の持ち腐れ状態だった君がルールの間隙をぬって席を勝ち取れるかどうか試していたんだ。あの状況でそこまで頭が回れば大したものだよ。実際君は合格したんだからね。」

「・・・これは、褒められているんだろうか。」

「じゃあ、何で俺を試そうとしたんだ？」

影は少し考えてから言った。

「・・・おもしろそうだったから、かな。俺、退屈することが一番嫌いなんだよ。おもしろいことのためになら、結構どんなことでもできちゃうんだよね。でも、結果的に良かったんじゃない。君は目標の席に座れたんだし。そうだ。やっぱりこれはプレゼントだよ。仲間に入れてくれたお礼として受け取ってくれないかなあ。」

そう言っつて、彼はこちらへ首を傾けた。

「・・・ああ、分かったよ。」

これはおもしろい奴がやってきた。俺の観察眼がそう言っている。でも、なかなか骨がありそうだ。下手をしたらこっちが「おもしろいこと」に巻き込まれてしまう。

それでも、巻き込まれるのも悪くないかもしれないと、そう思っている自分がいるんだろうか。

外では高宮が三本目のシュートを決めていた。

「ねえ、切磋琢磨。」

「ん？」

「高宮、今左足でシュート打ったよね。」

「ああ。」

「高宮っつて、左利きなの？」

記憶を探る。

「・・・いや、右利きだったと思う・・・。」

その時、休み時間終了のチャイムが鳴った。

あつという間にグラウンドから人がいなくなっていく。たくさんの人に囲まれた高宮は、笑顔をくつつけて楽しそうに走っていた。そして俺は、あの氷の目を見た。それは一瞬のことだったけれど、遠くからでもよく分かった。

あの目を見たのは、ずいぶん久しぶりのことだった。

「ほら、早く帰ろうよ。」

影が図書室の出入り口辺りで手招きしている。気付くとその場には俺達以外誰もいなくなっていた。

今度また、サッカー教えてもらいに行つてやらないといけないな。そう思いながら、俺は窓辺を後にした。

冬の章1（前書き）

とうとう最後の章です。

この章はちょっと長くなるかもしれませんが・・・

冬の章 1

冬の章 (12月8日、月曜日、くもり)

期末テスト一週間前。恩着せがましく授業を自習に変えたじいさん先生は、ストーブの温もりとテスト作成の疲れからか、うとうとし始めていた。

教卓の向こうに座って軽くいびきまでかき出す頃になると、生徒達の視線もそつちにちらちらと移っていった。

それでも、教室に漂っている「勉強必死モード」が薄れることはなかった。

頭を机にくつつけんばかりの前傾姿勢でガリガリとシャーペンの芯を消費し続けるクラスメイト達。

見ているこつちまで目が悪くなりそうだ……。

やれやれ、と俺は読んでいた本に目を戻す。

テスト前なのに、周りが勉強しているのに、自分は読書。

余裕をかましている訳ではない。むしろ後ろめたい気持ちもしているのだが、やる気が出てこない。

背中の丸まった教室の中で、一人姿勢正しく本を読んでいる俺は、やはり目立って異質なんだろう。

でも、やる気が出ないのはしょうがない。頭に入りもしないのに漢字だとか英単語だとかを書き殴っているなんて、それこそシャー芯無駄遣いだ。それならまだ、良書を読み深め、心を豊かにする方がいいに決まってる。

まあ、この本が果たして良書に値するほどの立派なものかどうかなんていうのは、また別の話で……。

……ふざけてるな。

俺は人生ナメきってるのかもしれない。何もしなくても中の上く

らいはキープできているからといって、何もしなくていいというわけではないのだ。

でも、俺は思う。

一番ふざけているのは、こんな俺にあんな名前をつけたどこかの誰かなんじやないだろうか、と。

静寂の中、

「ふざけてるわ。」

いきなり隣から小さな呟きが聞こえた。

静寂の中、

「ふざけてるわ。」

いきなり隣から小さな咳きが聞こえた。

俺はぎよつとしてそっちへ顔を向けた。

声の主は藤野だった。いつものように窓の外を見つめながら頼杖をついていた。しかしその目は、飛んで行くクラスも校庭に迷い込んできた野良犬も追いかけてはいない。じつと一点を見つめたまま、目を開けたまま眠っているようにさえ見えた。

周りには聞こえていなかったようだ。みんな黙々と手を動かしている。

俺はさっきの言葉の意味を考え、考えたけど分かるわけもなかった。ので、まさかとは思ったが、自分が心の中で思っていたことを実は口でしゃべっていた可能性がないことを確認した上で、小声で彼女に話しかけた。

「藤野・・・藤野、どうしたんだよ。自習、しなくていいのか？」

藤野はゆっくりとこちらを振り向き、俺が持っていた本を一瞥した。

「人の心配する前に、そのおもしろそうな本を参考書に変えたら？」

「・・・ああ、これ？いいよ。今度貸してやるから。」

「・・・」

一瞬の間が空いて、

「そんなこと頼んでないでしょ。・・・でも、そうね、貸してもらおうかな。テスト終わるまでには読み終わっというてね。」

さらっと人のテスト勉強を妨害するようなことを言ってから、また窓の方を向いてしまった。

しばらくの間、静かなときが流れた。誰かのわずかな貧乏揺すり

の音がずっと聞こえていた。

ちらつと横目で隣をうかがう。

藤野はやっぱりどこか虚ろな目で窓の外を眺めたままだった。

しかし突然、その瞳がほんの少し揺れた。

そして彼女がこつちを向こうとしてきたので、俺は慌てて視線を本に戻さなくてはならなかった。

「ねえ、相談があるんだけど・・・。」

「え？相談？俺に？」

何事もなかったかのように顔を上げる。

と、そこには「藁にもすがる思い」を絶妙に表した藤野の不安げな表情があつたのだ。

その日の昼休み、俺は藤野の相談とやら聞くために待ち合わせ場所である資料室に向かっていた。しかし、

「何で着いてくるんだよ。」

後ろの二人を思いつきり睨み付ける。

「何言ってるんだ。一人で抜け駆けなんて、僕が許すわけないだろう。」

高宮が反撃してきた。そうだった、こいつも藤野の隣を狙ってたんだっけ。

「わかった。じゃあ高宮はいい。席替えの時の借りはこれで帳消しにしといてくれ。問題はこっちだ。何で陰までここにいる。」

「え？だって、おもしろそうだったから。」

「帰れ。」

「ひどいなー。俺だけ仲間外れにしないでよ。」

そう言いながら俺の背中をバシバシ叩いてくる影。結構痛い。

「ふざけるな。こんなことで帳消しになんかならないからな。僕はまだ一言も許したなんて言っていない。」

「わかったって高宮。半消しくらいにしとくから。」

「ねえ、いいでしょ。いっぱいいた方が楽しいって。」

「楽しもうとするな。」

そんなことをしていたら資料室に着いてしまった。

止めようとする俺の声なんて全く無視して勢いよくドアを開けてしまう影。そして高宮と一緒にずかずかと中へ入っていく。俺も慌てて後を追った。

藤野はもう来ていた。

予想外の大人数に驚いたのだろう。あるいはもの凄い音を立てて開いたドアの方が。おそらく両方だ。彼女は目を丸くしてこっちを

じっと見つめていた。

・・・仕方ないか。

俺は精神力をすり減らして臨機応変に説明するしかないのだった。「この二人も協力してくれるっていうから連れてきたんだ。俺一人じゃ大したことできそうもないし。たくさんいた方がいいかと思つて。あ、でもいらないならいいよ。今すぐ追い出すから。」

ちよつと本心が出てしまったのはご愛嬌だ。決して「うん、出て行つてもらえる？私が話したいのは切磋琢磨だけだから。」なんて言われるのを期待していた訳ではない。

「え、いいよいいよ。みんなありがとう。たくさんの方が助かる。」
実際はそんなもんだつた。期待していた訳ではないが、やつぱりちよつとがっかりだ。でも、めげてちゃだめだ。頑張れ、切磋琢磨
「藤野、相談つて何？」

俺が聞くと、藤野は少し俯きながら話し出した。

「あのね、私、今大学生とつきあつてるんだけど、その人がね・・・」

「ちよ、ちよつと待て藤野。誰と付き合つてるって？」

「え、大学生。」

「大学生!？」

ちよつとシヨックが大きすぎた。ただでさえくらい資料室が更に暗くなつたように感じた。シヨックを隠すのにかなりの体力を費やした気がする。

横では高宮がいたつて普通の顔をしていたが、心の中はぐちゃぐちゃしているに違いない。笑顔が固かつた。

影だけが平常心を保っているようだった。アメリカじゃこんなこと日常的なんだろうか。

藤野が続ける。

「お姉ちゃんの彼氏なんだけどね、家に遊びに来たとき、一目惚れしましたって言われて……。その時は断つたの。お姉ちゃんに悪いし、大学生なんて、歳離れてるし。でもね、その後もしつこく言うてきたの。付き合っ下さいって。」

「そのこと、お姉さんは知ってたの？」

影が訊ねた。

「ううん。お姉ちゃんには言ってなかった。お姉ちゃん、その人のこと好きみたいだったし、まだ付き合ってたから。そうしたら、告白もだんだんエスカレートしてきて、手紙まで届いてきたから、私、お姉ちゃんとは別れないっていうこと約束して、その人と付き合うことにしたの。」

「二股させたっていうこと？」

高宮が聞いた。

「そういうことになるわね。でも、全然楽しくなかった。いろんな所に連れて行ってもらって、いろんなものを買ってくれたんだけど、やっぱりどっかでお姉ちゃんのこと考えちゃうの。それに、そもそも私、その人のこと好きじゃないんだもん。長続きするわけなかったんだよね。」

そう言っ藤野は疲れたのか、近くの机に腰掛けた。

休み時間も残り少なくなってきた。

「三日前、お姉ちゃんにバレちゃったの。買ってもらったもの全部燃やされて、ヒステリックに叫ばれた。その時になって、やっと気付いたんだ。お姉ちゃん、本当にあの人のこと好きなんだ、って。自分は本当にひどいことしてる、って。だからね、きのう、別れようって言いに行ったの。もう私のことなんか忘れて、お姉ちゃんだけ見てあげて。お姉ちゃんは本当にあなたのことが大好きなんです、ってちゃんとやってきたわ。」

藤野が机から降りた。ちらっと時計を見てから壁に寄りかかった。

藤野が机から降りた。ちらつと時計を見てから壁に寄りかかった。「あの人、何て言ったと思う？ 十万用意しろ、だって。俺を一目惚れさせたお前が悪いんだ、慰謝料くらい払え、だって。もう訳わかんない。ほんと、ふざけてるわ。こんな人のどこがいいのってお姉ちゃんに聞きたくなかった。」

そう言ってから「あー、もうっ。」と壁を蹴りつけた。相当なストレスが溜まつているらしい。

「もちろん、そんな大金払えないって言ったよ。でも、払わないなら別れないって言われて、姉ちゃんと別れるって言われて、殴られそうになった。ねえ、私、どうしたらいい？ 中学生じゃバイトもできないし、親は神経質だから、こんなこと言ったらパニックになっちゃう。ってゆーかも、私がパニックになりそうだよ。」

藤野は本当に悩んでいるようだった。

誰にもそうだんできずにずっと抱え込んで、何とか頑張ってみても全然解決しなくて。きつと、ぎりぎりのところで、やっと持ちこたえていたんだろう。

俺がこう言うのを止めるストッパーはもう何もなかった。

「藤野、少しだけ待ってくれ。そうだ、二週間。その間に俺が何とかするから。」

「え、でも・・・そんな、悪いよ。」

「大丈夫だから。どうせやることなくてヒマなんだし。」

「何言ってるんだ切磋琢磨。『俺が』何とかする、じゃない。『俺達』だろっ？」

横から高宮が割って入ってきた。

「そうだ。俺達、仲間でしょ。」

影も加わる。

・・・仲間、ねえ。

下心見え見えの協力で涙が出そうだ。いや、俺だって下心がない
と言えは嘘になるが。

「・・・みんな、本当にいいの？」

藤野が不安そうに聞いてきた。

「ああ。だから心配すんな。安心してテスト勉強にでも集中してた
らしい。」

俺が言うと、もう藤野は目を潤ませていた。

「みんな、本当にありがとう。」

やっぱり極上の笑顔だ。これが見られれば俺は何だってするさ。
十万が何だ。大学生が何だ。そんな足の小指の爪くらい、小さな
問題だね。

しかし、この時はまだ、気付いていなかった。足の小指の爪ほど、
ぶつけた時痛いところはないということ。

5 (後書き)

昨日、家のドアに挟みました。足の小指の爪。
一人で涙目になってました。

三人並んで仲良く下校するのが日課になってしまった。

雪でも降ってきそうな寒さの中、速歩で歩く。

「高宮、あんたが自由に使える金はいくら？」

「523円。」

「影は？」

「十円玉が五、六枚。」

「・・・そうだよな。十二月後半なんてお年玉目の前のギャンブル的シーズンだもんな。俺なんか一文無しだ。」

自然に溜息が出てくる。

藤野の前ではああ言ってしまったが、十万なんてすぐに用意できるものではないのだ。

「・・・もしかして、何の考えもなしにあんなこと言ったのか？」

高宮が不安とあきれの入り交じった表情で聞いてくる。

「そうだよ。だってしょうがないだろ。あんな話聞いちゃったら、

ああそっか頑張れよで終わりにできないだろうが。」

「まあ、そうだけど・・・」

「おいおい、俺ばっかり責めるなよ。二人とも協力するとか言っただだろ。『俺達で』なんとかする、って」

「あれは君に何か考えがあるのかと思っただからだ。」

「はっ、何だよ、結局人任せかよ。」

「何だと？」

「ねえ、いい考えがあるんだけど。」

いきなり影が立ち止まった。

俺と高宮は、危うくこの言葉を聞き流すところだった。少し歩いてからさっと後ろを振り返る。

影が隣に並んできて、また歩き出す。

「CAって知ってる？」

「キャビン・アテンダント。」

高宮が自信ありげに答えた。

「何でこの流れでそんな答えが出るの？カンニング・アシスタントだよ。」

「何、それ。」

俺と高宮の声が重なった。

「知らない？隣のクラスの川口、親が中学の教師やってるんだって。テスト前になると問題が家に置いてあるから、こっそりコピーして百発百中の予想問題作ってるらしいよ。それを親が勤務してる中学の生徒に売りつけてるって。これがCA。カンニング・アシスタント。他校でも教師の子供で一儲けしてるのが結構いる。この学校の予想問題も地味に出回ってるよ。」

俺は驚愕した。まさかそんなビジネスが存在していたなんて信じられない。こんなのがバレたら大変なことになるというのに、教師の子供がよくもまあ恐ろしいことを思いついたもんだ。

「それでだ。俺達もCAに加わろうと思う。」

「そんなこと、できるのか？」

高宮も目を丸くしていた。

「できるよ。いわゆるセールスマンのような働きをして、利益の何割かを頂くってわけ。教師の子供は何人か把握してるから、その人達と交渉して予想問題を売りつける仕事を引き受ける。名付けてカンニング・アシスタント・セールス。CAS！」

影が高らかに宣言した数秒後、俺は高宮にこそこそと呟いた。

「CAS、だな。」

「・・・本当だ、カスだ。」

こうして、俺達の一大プロジェクトは幕を上げたのだった。

6 (後書き)

もうすぐお年玉の季節です

翌日、隣のクラスの川口に早速面会を申し出た。

「えーっと、何か用？」

休み時間の喧噪から抜け出てきた彼は、冬だということのによく日に焼けた、野球少年だった。

当然ながら、知りもしない他クラスの三人組に呼び出されて戸惑っていた。

「いきなり呼び出しちゃってごめんね。ちょっと話したいことがあるんだ。」

そう影がいうと、川口は頭一つ分背の高い影の方へ顔を向け、そのまま目を見張った。

そうだった。こいつはそこら辺には滅多にいないくらいの美少年なのだ。普段見慣れている俺達はいいが、初対面の人間が驚かないはずがなかった。

目を見開いたままの川口はそのまま、影は周囲を確認し、小声で早口にこう言った。

「CAについて、話がある。資料室までついてきて。」

CAという言葉で我に返ったらしい川口がこくりと一つ頷いて、俺達は資料室へと向かった。

俺が資料室のドアを後ろ手に閉めた直後、話を切り出したのは意外にも高宮だった。

「川口、君は本当にCAをやっているのか？」

昨日藤野が座っていた席に腰掛けながら、そう訊ねた。

「ああ、やってる。」

あっさりと川口が答えた。

高宮は、もう何も話そうとはしなかった。俯いて黙っている。

俺にはあんたの気持ちや手に取るように分かるよ。『今までのテ

スト勉強の苦勞は何だったんだ・・・』だろ？

すっかり黙り込んでしまった高宮の肩をトントンと叩くことで勞りの気持ちを表した。大丈夫。その苦勞はきつとどこかで役に立つ、たぶん。近い将来で言うと通知票あたりでな。

「俺は神宮司影。こっちが高宮瞬で、こっちが切磋琢磨。君にいい商談があつて呼び出したんだ。」

影の言葉で交渉は始まった。

「まず、内容を説明する。君は出題率100パーセントのテスト予想問題を他校の生徒に売ってるんだよね。」

「ああ。」

「俺達は、そのお手伝いがしたの。予想問題をいろんな人に売りつけるセールスマンの仕事を任せて欲しい。ねえ、一人で売り歩くには限度があるだろう？でも、俺達三人でやればより多くの人に問題を売れる。売り上げは伸びる。君はテスト勉強の時間が増える。問題をコピーして俺達に渡せば、後は勝手に金が入ってくる。こんないい話、滅多にないよね。」

すると、川口はいぶかしげに聞いてきた。

「タダじゃ、ないんだよな。いくらなんでも虫が良すぎる。」

「さすが、よくわかつてる。もちろん報酬はもらうよ。全売り上げの八割。これでどう？」

「八割?!冗談言つな。そんなんじゃないよ今までのやり方の方がよっぽど儲かる。せめて五割」

「はい決まりー。じゃ、五割で。」

「ちよつと、待て」という川口を「まあまあ」となだめる影。

「君は予想問題をいくらで売ってるの？」

「千円。」

「最高で何人に売った？」

「・・・確か、前回の七人が最高だ。」

「わかった。じゃあ、俺達は最低でも20人に売りつける。そうすれば売り上げは二万円。君に一万も入ってくる。もし20人に売れ

なくても、一万円は必ず君に渡すよ。これでどう？悪い話じゃ、ないだろう？」

川口は考え込んでいた。まだ納得いかないらしい。

よし、俺も加わってみるか。

「安全性は保証するぜ？教師にバレるようなへマは絶対しない。誰彼かまわず売るんじゃない、信頼できる奴にしか話しかけないし、もし、万が一バレた時は川口の名前は出さない。こつちには天下の優等生、高宮瞬がいるんだ。高宮が全力であんたをかばえば、疑う教師なんて、いない。」

ちらつと、フツシンのことが頭をよぎったが、俺は続けた。

「じゃあテストが終わった後、予想問題を全部回収してあんたに返す。これで絶対安心だろ？」

川口はまだ考えていたが、数秒後、右手を差し出してこう言った。

「わかった。商談成立だ。明日の昼休み、例の予想問題を渡すから、ここにきてくれ。」

俺達はしっかりとその手を取った。

8 (前書き)

あけましておめでとつございます。お正月です。おめでたいですね。ことよろです。

友達から来た年賀状にこんなことが書いてありました。

「あけおめ〜しもよろ〜」

しもよろ・・・?

こと「しもよろ」「しく

だということとは30秒考えないとわかりませんでした。

俺達には時間がない。その日の放課後には、もう次の交渉を始めようと、取引先の家へ向かっていた。

「俺が見当をつけてるのは全部で四人。川口とは成立したからあと三人だよ。今日中に全員と成立させたいところだね。」

そう影は言うが、俺は不思議でしようがない。何なんだ、その情報。教師の子供なんて、そう何人知っているものじゃないはずだ。一体どこから掴んできたんだか……。

しかし、影がただ者じゃないことはもう分かっているので深くは考えない。

「ところで、影、君はどうやって勉強してるんだ？とてもガリガリやるようには見えないのに、今回は学年三位だったじゃないか。」

高宮が訊ねたのは、実は俺も気になっていたことだった。

そう。影は成績がいい。授業中でも平気で爆睡するような奴なのに、テストの点だけはいいのだ。これじゃ自然の摂理になくなってない。摩訶不思議である。

「よし、じゃあ特別に教えてあげよう。実はね、アメリカで覚えたとっておきの方法があるんだ。」

何だって！？思わず身を乗り出す。

「テスト用紙にシャーペンで字を書くときのカリカリって音、あるだろう？あれを聞いただけで何の文字を書いているのか解読できるんだ。前は高宮の解答を写させてもらったよ。ま、作図とグラフの問題はさすがに無理だったけどね。」

そうか、高宮と影は出席番号が繋がっている。テストの時、影の後ろの席は高宮なのだ。学年一位の解答を盗めば、三位くらいにはなれるという訳か。

それにしても、人間業とは思えない芸当だ。何の参考にもならな

い。

「どのくらい、僕の答案に頼ってきたんだ？」

おそろおそろ、高宮が訊ねた。

「うーん・・・十くらい、かな。」

「十？ああ、十問か。それで三位ならすごいじゃないか。」

ほっと安心する高宮。しかし、

「いや、十割だよ。」

「じ、十割、だと・・・」

高宮、あなたの気持ちは手に取るように分かるよ。『今までの苦労は何だったんだ』だろ？

「君たちもこの技をマスターすればどんなテストだって怖くないよ。ハーバードだってマサチューセッツだって楽勝だ。」

え、まさか・・・影、もしかして。

「ま、マークシート配られた瞬間に玉砕したんだけどね。」

「受けたのか！？あのハーバードを、その歳で!？」

「あんたバカか！テスト形式くらい事前に調べとけよ！」

すっかりシヨックから立ち直った高宮と、つい突っ込まずにはいられなくなってしまった俺に挟まれた影は、その攻撃から逃れるように手近なインターホンを鳴らした。

「ほら、着いたって。ここが次の取引先の家だよ。」

8 (後書き)

ハーバード大学の入学試験がマークシートかどうかには何の根拠もありません。

信じないでくださいね。

影と高宮の出席番号は名前順ではなく誕生日順で繋がっています。

私の中学も誕生日順でした。

あ、どこでもいいですか。

交渉相手二人目は、T中の吉長さんという女の人で、俺達より一学年上の二年生だ。ポニーテールがさらりとなびく、テニス部って感じの人だった。

彼女は影のことは見るなり目を丸くし、それから妙に親しげな態度を態度を取ってきた。これは・・・見かけに騙されてるな。俺は一瞬で気が付いた。

吉長さんのCAの内容は、川口のものと同じだった。一部千円、最高は7人。

しかし、川口の時とは違って、八割の報酬を持ちかけたところ、あっさり承諾してくれたのだ。

彼女が交渉の間中ずっと影を見ていたことは言うまでもない。まったく、便利な顔だ。

俺達はセキユリティー面を保証してから家を離れた。時間はものの10分とかからなかった。

交渉相手三人目はK中の岡本さんという二年生で、文化部系の頭が良さそうな女の人だった。

彼女のCAも、一部千円だったがこちらは最高15人となかなかのやり手だった。

今度は高宮が好みの真ん中をついたらしく、やはり八割でOKしてくれた。

セールスにおける見た目の重要さを痛感した。

そして、最後の交渉相手はS中の小谷という一年生で、おそろしく背の低いお坊ちゃまだった。見た目の通用しない相手だ。

影、高宮ときたから、次は俺の番かも・・・なんて期待を抱いていた俺は、人生こんなものさ、と諦めるしかなかった。もちろん、あの二人を差し置いて俺をタイプだと思ってしまうような女子がいるかどうか

かなんていうのは、その辺に投げ捨てるべき問題だ。

影の情報によると、彼はまだCAを知らないらしい。

「えーっと、誰ですか。」

ドアの隙間からひよっこりと出てきた小谷は明らかに不審そうな表情でこつちを見ていた。

影が一步前に出る。

「いやいや、妖しい者じゃないんだよ。俺達は隣町の中学一年仲良し三人組。よろしくね。」

仲良し三人組のところで思いつきり影を睨んでやったら、同じく眼を飛ばしていた反対側の高宮と睨み合うことになってしまった。

「ねえ、小谷君。俺達とCAやらない？」

「・・・しーえー？」

「カンニング・アシスタント。君のお母さん、中学の先生やってるだろう。」

「ど、どうしてそんなこと知ってるんですか。」

「ん、まあね。いろいろと調べたから。それでさ、君にちょっと頼みがあるんだ。母さんが作ったテストを俺達に流して欲しい。」

「・・・何だつて？そ、そんなこと、できるわけないじゃないか。」

「知ってるんだよ。君、テスト前になるとお母さんから問題渡されて、解いた後採点されるんだろう？それだよ。その問題をちよつとコピーして俺達に渡すだけでいいんだ。」

「嫌だよ。こんなこと誰かにばれたら大変だ。」

「ああ、それは大丈夫。もしばれたとしても、君のお母さんが全力で隠し通してくれるよ。テスト前に問題を息子に渡していたなんて結構大問題になる可能性が高いからね。きっと必死になってくれる。」

「・・・悪魔め。」

「で、でも・・・こんなのいけないことだ。」

小谷はまだ納得しなかった。なかなかのまじめ君だ。俺は素直に感心した。

「もう帰ってくれないかな。僕だって忙しいんだ。」

小谷はそう言ってドアを開け、中に入って行くこととする。

「三千元。三千元で問題を買って言ったら？」

影の言葉で閉じかけていたドアが止まった。

「来週12月16日、妹の誕生日。君は昨日高校生にカツアゲされたね？今いくら持つてるんだろうねえ。誕生日プレゼント、買ってあげられるのかなあ。」

「……………」

「協力、してくれない？」

俺は確信した。こいつは悪魔だ。

9 (後書き)

かなり寒くなってきました。自転車通学には厳しい季節です。最近は何れでも体を温めようと坂道を全力でこぐようにしています。すると、不思議なことに到着時間が早くなったではありませんか。浮いた時間を睡眠に回せて一石二鳥です。体力も付いた気がします！

テスト四日前の放課後。

小谷から受け取った問題をコンビニでこそそとコピーしたところ
で四種類の予想問題の用意が終わった。

三千円で買い取るとは言ったものの、俺達の中にそんな大金を出
せる奴はいなかった。クラスの男子三人から千円ずつ借金する
ことになってしまった。その時ちよつと利子の問題でメモだが、高
宮が一言、「頼むよー、今ピンチなんだ。」と言っただけで、じゃ
あ利子はいらない、と簡単に引き下がってくれた。人気者は便利だ。
「ピロリロ〜ン・・・」

陽気な電子音に見送られて俺達はコンビニを出た。

自動ドアが開いた瞬間、外の冷たい空気が襲いかかってくる冬も
本番を迎えようとしていた。

「ううっ、寒っ。」

制服の上に何も着ていない高宮が身震いした。

時間は五時半。外はもうとつくに暗くなっていた。お世辞にも都
会とは呼べないこの辺りには道を照らす街灯もまばらにしかない。

真っ暗な道路の途中に申し訳程度の光の円があつて、その先にま
た真っ暗な道路が続いていく、そんな感じだった。

家の方向が同じだったので三人並んで歩いた。

角を曲がって最初の光の中に入った時、それとほぼ同時に同じ円
の中に入ってきた人物がいた。

俺は思わず声を上げてしまった。

「あっ」

フッシンだ。

間違えるはずもない。よれよれのくたびれたジャージにマスク、
冬だというのにサングラス。不審者にしか見えないクラス担任が目

の前にいた。

「おー、何やってんだあ、お前ら？テスト勉強しなくていいの？
？そのための早下校じゃねえか。」

もちろん「CAの準備やってましたあ」なんて言えない。俺は苦し紛れにこう答えた。

「高宮の家で勉強会やりました。」

するとフツシンが首を傾げた。

「高宮の家、この辺じゃないだろ。」

しまった。調べられてたか。

「ちよつと小腹が空いたけど、家に何にもなかったんで、コンビニ
に行つてたんですよ。」

ナイスなフォローは高宮だ。さすが、作り話を毎日16個も考
えてるだけのことはある。

しかし、

「ふーん、コンビニ、ね。隣町まで？」

フツシンはますます俺達を疑ってきた。サングラスがじつとこ
ちを見ている。

何か、何か言わないと。

「あのコンビニにしかない幻のメロンパンがあるんですよ。」

おい影！下手な嘘ならついたりすんな！

フツシンがこつちへ一歩近付いてくる。

「お前ら、いけないこと、してるでしょ。」

俺達は動けない。

「分かるんだよ、そういうのは。目エ見りゃ一発だ。何やった、万
引きか？」

「・・・そんなこと、しませんよ。」

高宮はそう言いながら微妙に右腕を後ろへ隠した。その手には予
想問題が入った紙袋を持っていた。

フツシンは目ざとくその行動を見つけ、また近付いてくる。

「ん？何入ってたんだ、その袋。」

まずい。このままじゃバレル。

どうしよう、どうしよう。逃げるか？だめだ。そんなの自分から悪いことしましたって言うようなもんだ。じゃあ・・・

サングラスとマスクがもうすぐ側にまで迫ってきていた。

もうしようがない、一か八かこれに賭けよう。

俺は勇気を振り絞って目の前のマスクとサングラスに手を掛けた。
えいっ！

両手を素早く引っ張った。サングラスが地面に落ちるカシャツという音がした。

自分でも驚くほど鮮やかに、フッシンのトレードマークは取り払われた。

それは、ほんの一瞬の出来事だった。

それは、ほんの一瞬の出来事だった。

その場にいる誰もが啞然としていた。行動を起こした張本人の俺でさえも。

・・・うわ、超美形。

目に飛び込んできたそれに思わずたじろぐ。

頭に蘇ってくる会話があった。

『何でマスクとサングラスをしてるんですか。』

『俺がかつこよすぎるからです。』

あれは冗談じゃなかったのか？

突然、パシャリという機械音。

見ると、影がフツシンに向けてケータイを構えていた。

「先生、撮っちゃいましたよ。」

くるり、とケータイを反転させる。

画面には、よれよれのジャージを着た美青年がばつちりと映っていた。何という高画質。

フツシンは黙り込んでいた。

「これ、見られたらまずいんじゃないですか。前の学校では、いろいろとあつたんでしょ？」

影が意味ありげに笑った。

「先生、俺達と取引しない？」

「・・・取引、だと？」

「そ。先生は今日ここに俺達がいたことを忘れる。そうしたら俺達もこの写メを学校中にバラまいたりしない。ほら、平和的解決じゃないですか。」

フツシンは苦虫をかみ潰したような顔で吐き捨てた。

「なーにが平和的解決だ。」

そしてこっちをまつすぐに睨み付けてきた。いつもサングラスの奥にあった切れ長の目が俺達を射抜いた。

「あのな、悪いことしたら、そのうち自分に返ってくるって昔からよく言うだろ。そうなんだよ。世界は上手くできてんの。たとえ誰かのためにやったことだとしても、悪いことは返ってくる。それはあんなことしなきゃ良かったって後悔することかもしれないし、後悔しなかったとしたら、そりゃ人間的なもんを何か失くしたってことだ。そんなのが返ってきたって大したダメージは受けないと思うだろ？それがな、こーいうもんってのはずーっとしつこく追いかけてくる。逃げらんねえんだよ。心のどっかに居座って、いろんなことが上手くいなくなってくる。」

辺りは静まり返っていた。何の音もしない。ただフツシンの声だけが暗闇の中に重く、重く溶けていった。

彼はそしてこう言った。

「・・・怖いぜ。取り返しつかなくなるのって。」

その言葉は俺達に向けられているようで、そうではなかった。確かにフツシンの口から生まれてこっちに進んできているのに、目の前ですつと闇に紛れて、もう少しのところまで届かない。もしかしたら始めから俺達に向かってなどいかなかったのかもしれない。

よくわからなかったが、それがいつものフツシンでないことだけは、はっきりと感じ取ることができた。そうしたら、どうしようもなく居心地が悪くなった。今すぐこの場から逃げ出さなくなった。

こんなフツシンは見たくない。

「それ、返してくれよ。」

急に、目の前に腕が出てきた。フツシンが俺に手を差し出している。

俺は「それ」がマスクとサングラスであるということに気付いてから、手に持っていたものをフツシンに渡した。

2つのトレードマークが装着されて、やっといつものフツシンに戻ったような気がした。

「悪い、さっきのはちよつと大袈裟だった。そこまで悪いことはしねえよな。でも、自分に返ってくるってのは本当のことだから、覚えとけよ。」

そう言ってフツシンは光の円から出て行った。

しばらく、歩き出すことができなかった。

フツシンは、自分達には想像も付かないような重いものを抱えているらしい。それを感じ取ってしまっただけに、足が動き出さないのだ。

数秒後、角の向こうからまた声が聞こえてきた。

「安心しろー、お前らが万引きなんてしないことくらい、分かったから。じゃ、気をつけて帰れよ。」

その声は暗闇に消えていった。

どれくらいそうやって固まっていただろう。高宮が「うっつ、寒っ」と呟いた。それでも俺達は、やはり足を踏み出せなかった。

「なあ、もう帰ろう。僕、上着着てないから寒いんだ。」

そう言って先に歩き出す。ワntenポ遅れて俺と影も小走りで追いかけて、後に続いた。

その帰り道で影に、フツシンが前の学校で何をしたのか訊いてみた。

さっきのはハツタリで本当は何も知らなかったんだと、彼はそう言うてうつつむいた。

それが本当のことなのか、嘘をついているのか、俺には判断できなかった。

12 (前書き)

前回はすごいシリアスっぽくなってしまいました。

予想外です。こんなはずじゃなかったんだけど・・・

どうやって収集つけようかー

勢いで書きちゃったんで自分でも先が読めなくなってきたてしまいました
した(・o・)

ま、なんとかします。

この話、軌道修正のつもりなんですが、急カーブですかね。

テスト三日前。

教壇ではどうしても時間内にテスト範囲を終わらせたい無計画な社会教師が怒濤の授業を繰り広げていた。

明日は土曜で学校は休み。しかも今は六時間目。もう時間は残されていないのだ。

黒板がガタガタと音を立てる程の筆圧で乱暴に書き殴られた文字は、もはやエジプトの古代文字にも匹敵するほどに解読が難しくなっていた。

しかし、その滑舌の良さは尊敬に値する。教科書、資料集の文章をかいつまみ、自らの知識も織り交ぜた説明は速い、かまない、間違えない。その上、聞き取りやすく分かりやすい。

まるでテレビのニュースを三倍速にしたようななめらかさ。そのスピードで話せるんだからきつと頭の回転も相当のものだろう。

だから先生、黒板はもういいって。

授業開始から20分後にして、すでにチョークが五本分、古代文字の餌食になっていた。ノートなんて誰も取っちゃいない。まず文字の解読が不可能だ。

俺は暇を持って余したシャーペンを意味もなく握りながら耳だけに神経を集中させていた

織田信長が10分間でその生涯を終えた時、突然右斜め前から紙くずが放られた。出所は高宮の席だった。黒板と向き合ってたにかを書いてある先生は気付かない。

紙くずは空中で大きく弧を描き、5、6人の頭を越えて俺の机に着地した。

すさまじいコントロールだ。高宮はこつちを振り向きもしなかったというのに。

早速ぐしゃぐしゃに丸められた紙を開く。それは破かれたノート

のページだった。

切磋琢磨へ

計算したら大変なことに気付いた。

川口とのCASで入る金額

500×20＝1万円

残り九万を稼ぐには、

吉長さんと岡本さんとのCASだと113人。

小谷との場合、1部あたり千円で売るとして90人。

こんなにたくさん売れるのか？

高宮より

俺は衝撃を受けた。まさかこんな人数になるだなんて思ってもいなかった。

10万という金額がいきなり現実味を帯びて目の前に立ちただかっってきた気がした。それは、中学1年の自分達にとって、とてつもない程の大金だったのだ。

もちろん、113人に予想問題売りつけるだなんて不可能だ。

じゃあ値上げするか？それでも限度はあるだろう。じゃあ・・・

俺は考えた。あらゆる手段を想定し、その可能性を吟味した。

考えて考えて考えて・・・徳川家康が江戸幕府をちゃっっちゃと開いた時、ついに一つの打開策が浮かんできたのだ。

俺はニヤリ、と微笑んだ。

できぬなら、やって見せよう、CAS。

・・・あ、徳川家康は鳴くまで待つんだっけ。

10万の大きさも、大学生も、昨日のフッシンも、その後の影の言

葉も、頭から消え去っていた。

俺達は、「今」をどうにかすることで精一杯なのかもしれない。
昔のことなんか、先のことなんかいちいち考える暇はない。

12 (後書き)

無理矢理って感じですが、何とか方向は元に戻りました。
よかったですよかったです。

テスト2日前。

熱心な先生による補習があるため、テスト期間で部活動停止中の土曜日でも、学校は開放されていた。

しかし、俺達が学校に集まったのは補習を受けるためではない。

「今日二人に集まってもらったのには理由がある。」

窓のない資料室の中、蛍光灯の白い光を浴びながら俺は宣言した。「他にもない、CASの打開策に着手するためだ。高宮、昨日の計算結果を。」

「一番利益が小さい川口の問題は、最低ラインの20人だけに売るとして収入は1万円。残り9万円をどう稼ぐか考えると、安全面を優先して三人の問題を均等に売るのがいいと思う。問題の値段が高からといって一つの学校に集中すると、それだけバレやすくなるから。そうすると、一部800円の吉長さんの問題を34人に、同じく800円の岡本さんの問題も34人に、小谷の問題は千円全部が入ってくるから少し多めの36人に。この人数分売り付けたとして、9万4千円だ。問題売り付ける人数は全部合計して124人。これが最少人数だ。」

「ありがとう高宮。計算ではこうなったけど、124人相手に商売するなんて不可能だ。安全性の方は、まあ、かなり高い確率でバレるだろうな。そこで俺は考えた。真面目にやってたんじゃ、この商売は成り立たない。じゃあどうするか。策は二つある。一つは、問題の値段を決めないっていうこと。セールスをする時、交渉してなるべく高く売り付けるようにするんだ。そこでいくらか稼いでも川口には1万円だけ渡す。吉長さんと岡本さんには、売り上げをごまかして2千円ずつ渡す。あんたら二人がちょっと仲良くしてあげれば納得してもらえるはずだ。どうせ問題は後で回収して渡すんだ。何

人に売ったかなんてわからない。それから、もう一つの策。問題の解答を作る。今なら解答も付いてこのお値段！とか言っとけばみんな飛び付くに違いない。」

「なんか、テレホンショッピングみたいだな。」

高宮が呟いた。

「ちょっと高宮、テレホンショッピングなめないでくれる？あれはよくできてる。俺、買っちゃいそうになるから見ないようにしてるんだぞ。」

なぜか熱くなる影を変な目で見る高宮。

「影、欲しいものが主婦の皆さんと同じって、大丈夫なのか。」

「え、だって欲しくなるでしょ、勝手に動いて掃除してくれる掃除機とか。」

「そんなものがあるのか?!」

高宮の目が輝いた。

「あ、ほら欲しくなった。今なら充電用のスタンドも付いてお得になってるよ。」

・・・ここでテレホンショッピングやってどうする。

「おいおい、二人とも、俺の話聞いてたのか？今日集まったのは、その解答を作るためなんだよ。」

「え?」

俺の言葉で二人の会話が止まった。

影がこっちを向き、だだっ子のようにふて腐れる。

「えーっ、俺たちが作るのーっ!？」

他に誰がいるんだよ。

13 (後書き)

問題を売る人数の最低ラインは一応計算で出しました。誤差はありますが。かなりの時間がかかったので理数系への道は諦めた方が良さそうです。

次の話はさっさと書きちゃいたいと思います。

あと、ちよっと前に新しいの書き始めたんでよかったらどうぞ。

「いけづら」ってやつです。

14 (前書き)

ニュースを見てると、地震の被害の様子をやっているのもドキッとします。

被災地に住んでいる方は、私なんかには想像もできないほど本当につらいし大変だと思います。この大変な時をなんとか頑張っ乗り越えて欲しいと思います。

実を言うところ、資料室とは名ばかりで、使わないけど捨てるのはもったいないような物を放り込むための部屋なのだ。

壊れかけの掃除ロッカーから落とし物の消しゴムまで、ありとあらゆる物が無造作に存在するここには余った教科書や、勝手に送られてくる参考書の見本なんかも全部集結しているので、今の俺達にはもってこいの場所だった。

予想問題は全部で5冊。3人がかりで解いていけば半日かそこらで解答が出来上がるだろう。そう計画していた。

しかし、問題を開き、さあ始めるぞとシャーペンを構えたところで、俺達の手は止まった。

どういうことだ。

問題は、三年用だった。紙一面が訳の分からない数式、図形、グラフのオンパレード。応用なんてレベルじゃない。まさに次元が違うのだ。

どうやら、5冊の予想問題のうち、小谷から預かった物以外の4冊は全て三年用らしかった。

影によれば、この時期の三年は受験勉強で忙しく、学校のテスト勉強にあまり時間をかけられない、でも内申点はしっかり稼いでおかないといけない、という窮地に立たされているらしい。つまり、CASの絶好のターゲットである。

彼は、そこまで考えて取引先の的を絞っていたらしい。どこからそれだけの情報を仕入れてくるのか、恐ろしい人脈ネットワークだ。俺達は、予定していた一人で1冊を担当するというシステムを急遽変更し、頭を寄せ合い知恵を出し合いながら三人がかりで1冊ずつ片付けていくことにした。

教科書やら参考書やらの山積みの中、「三年生」と入っているも

のを片っ端から引つ張り出してきて、よく似た問題に当てはめて考える。それは、キーワードのないクロスワードパズルを解くようなものだった。当然、頭でいちいち理解している暇などない。

論理的思考？そんなもの俺達の辞書には載ってない。大切なのは直感とフィーリングさ。それだけさ。

ただ一つ言えること。テスト直前の二日間をこんなことに費やした俺達は、正真正銘、狂ってる。

14 (後書き)

最近、このシリーズのストックも少なくなってきました。

続きをどうしようか考え中です。

ちゃんと決着は付けると思いますが、最終的にどうなるのかは自分でもまだ分かりません。まだ残っている謎？的なものもありますし・

・
・
マイペースにやっています。

ここまで読んで下さっている方、本当にありがとうございます。

そして、できればこれからも、気長にお付き合いよろしくお願います。

15 (前書き)

ちょっとと長めになってしまいました。

テスト当日。俺達の戦いの場は教室ではない。

午後8時30分。駅前の塾ロードは学生達で溢れかえっていた。

塾ロード。そこには学習塾や予備校、ピアノ英会話そろばん等の各種教室が所狭しと並び、子供が集まるのをいいことに、コンビニやマクドナルド、更にはゲームセンターまで軒を並べるといふ充実っぷりの不思議な場所である。

俺達三人は、あらゆる塾の中でも最もレベルが高いとされている大手学習塾「油沢ゼミナール」通称「油ゼミ」の前で作戦会議を開いていた。

「いいか、二人とも。セールスは客を選ぶことが大切だ。特にC A Sの場合、不特定多数の中学生に数だけ売ればいいってもんじゃない。あんまりたくさん声を掛けると噂になってバレル。セールスした相手には絶対売り付けるんだ。そうすれば客も買った責任があるから誰かにバラしたりはしなくなる。そんなことをすれば、買った自分も咎められるからな。客を選ぶ。これは鉄則だ。」

「ちよつといいか、切磋琢磨。」

高宮が割り込んできた。

「ん、何だよ。」

「客じゃない。お客様、だろ。」

「・・・うん。まあ、大切だよな、そういうのは。気を取り直してもう一度。」

「お客様をお選びする、これが鉄則だ。」

「情報はあるのか？」

今度は影だ。

「ああ、ちよつと前までここに通ってたからな。内部情報は大体把握してる。」

俺は先日、男女平等だか何だか知らないが男子を指名する時苗字に「君」ではなく「さん」を使ったがる講師に「じゃあこの問題、せつさささっ」と、盛大に舌をかまれたことが原因で、この油ゼミを辞めたばかりなのだ。

腕時計に目をやる。8時40分。中1の授業が終わる時間だ。

ちらほらと入口から出てくる1年が現れ始めた。

でも、ここで出て行ってはいけないのだ。

「なあ、授業、終わったみたいだけど。」

高宮が呟く。

「だめだ。この時間に出てくるのは一番下のCクラスの連中なんだ。俺達が狙うのはAクラスかSクラス。奴らは塾を頼り切ってるから、学校の成績は頭の割にイマイチなはずだ。そこに入り込もう。みんな授業後にたつぷり質問してから出てくる。あと30分は待たないとだめだ。」

俺はそう言ったが、高宮も影も早く問題売り付けてしまいたくてうずうずしているようだった。

我慢強く待つこと35分。油ゼミから制服の女子が出てきた。

あのセーラー服は間違いない。小谷の母親が勤めている中学の生徒だ。

行くぞ。隣の二人に目で合図を送った。すぐにうなずきが返ってくる。

「すみません。僕達、CASというものをやってるんですが。」

打ち合わせ通りに影が声をかけた。

女子生徒が「わたし？」と自分のことを指差す。

「そうです。あなたの学校の定期テストは明後日ですね。」

「・・・そうだけど。何？」

おっとまずい。明らかに不審柄れてるぞ、これ。影の顔が通用しないなんて、油ゼミ、恐ろしいところだ。

おい、チェンジだ。チェンジ。影と高宮に目で伝える。ここは人当たりのいい高宮で攻めよう。

素晴らしい神経でそれを感じ取ったらしい高宮が、影に替わって女子生徒に話しかけた。

「僕達があなたのテストをお手伝いします。」

「え、何それ、どういうこと?」

「もし。ここにテスト問題があるとしたら。」

そう言っつて紙袋を持ち上げる高宮。女子生徒の目はそれに釘付けになっている。

「・・・もしかして、持ってるの?」

「さすが、察しが早い。これさえ手に入れば時間に余裕がなくても高得点間違いなし。あなたなら、明日一日あれば満点は確実でしょう。」

「すごい。どこから入手したの?」

「信頼できる人脈。これしか言うことはできません。」

「ま、そうだよな。バレたら大変だもんね。うん、でも興味ある。まさか、お金は取らないでしょ。」

「うっ、痛いところを。」

「5000円でどうでしょう。」

高宮はさらりと言った。

「5000円!?!」

「しーっ、静かに。そろそろ人が出てきますね。場所を変えましょうか。」

「うまい。ここは一旦状況を変えるのが良さそうだ。」

俺は再び高宮に視線を送った。ここからは影にバトンタッチだ。

値段交渉ならあいつの右に出る者はいない。

路地裏へ移動すると早速、影が交渉を開始した。

「5000円。高いですか?」

「高すぎ。そんなに持ってない。」

「では4000円でどうでしょう。」

「今日3000円しか持ってない。」

この時期3000円が財布に入っているだなんてリッチな中学生

だ。

「それなら3000円で。この辺りがぎりぎりのラインですよ。」

「うーん。3000円ね・・・」

彼女がまだ納得しないのを確認すると、影はとうとう奥の手を出した。

「実はですね、問題とセットにして、ある物も販売しているんです。」

そして紙袋から一つの冊子を取り出す。

「これが何だか分かりますか？」

女子生徒の目は、やはりそれに釘付けになっていた。

「・・・もしかして、解答？」

「ご名答。本当は千円追加でセット価格になるんですが、今回は特別に3000円でOKです。さあ、どうです？3000円でテスト問題、さらに解答まで付いてくる。優秀なあなたなら100点は間違いなしです。」

「・・・。。。」

「塾へ通って一生懸命勉強しているのに、学校のテストとは範囲が違う。勉強量と釣り合わない点数に納得いかないことはありませんか？それでも時間は限られている。両方をやるには無理があるでしょうっ？」

彼女は、もうそんなに迷わなかった。

「わかった。それ買う。」

15 (後書き)

いよいよこの三人が胡散臭くなってきました。

それにしても、塾ってこんなに恐いところでしたっけ。

16 (前書き)

やっとの更新です。

4月はやっぱり疲れます。

「せーのっ！」

その日の夜22時15分、塾ロードのファミレスにてCAS一日目の成果が三人の間で公開された。

最初の一人を除いて、俺達は別行動を取っていたのだ。一斉に出された三枚の売り上げメモを見比べる。

俺の総売上は三人で1万2千円。

高宮は五人で2万円。

影は四人で2万6千円。

最初の女子生徒の3千円を加えて合計6万1千円。なかなかいいスタートだ。

影がアイスクリームをスプーンでつつきながら言った。

「やっぱり3年は狙い目だよ。大金も平気で持ち歩くと、財布の紐も緩い。しかも切羽詰まってるから飛び付き方が違うね。俺、8千円で二人分も売ったよ。」

「すごいな影。僕なんか5千円が限度だったのに。」

そう言っただけでジューズを吸い込む高宮。

あれ？俺は違和感を覚えた。

今、高宮が本気で影を称賛しなかったか？

俺はまだあの氷の目を忘れてはいない。よく見ていると、あれから何度も高宮がそんな目をするのがあった。

でも、今のようにならぬ誰かを褒めるなんてことがあったのだろうか。

負けた悔しさで落ち込むのではなく、素直に相手を讃える。そんなことがあったのだろうか。

『あんな、いろんなものに追い詰められてる気がする。』あの日、屋上からアリジゴクの高宮に言った言葉。彼は否定していたけれど、

俺の目にはちゃんと映っていた。

本当に高宮は追い詰められていたのだ。何からだろう。周りの期待でなければ実力の限界でもない。自尊心？偽りだらけの生活？

しかし、それが何であれ、最近の高宮からはあの日のように追い詰められている感じがしないのだ。

なぜだろう。高宮は確実に変わってきている。

ズゴゴゴゴゴ……。

ダイナミックな音を立て、最後の一滴までジュースを飲み干した俺を、二人が睨み付けた。

「うるさい。マナーをわきまえろ。」

そう言った影を睨み返す。

「溶けたアイスをストックですすったあんたにだけは言われたくないな。」

俺は時間を確認して立ち上がった。塾ロードでは夜10時半以降を高校生の時間とって、中学生がうるうるしていると厄介なことに巻き込まれやすいのだ。

「そろそろ高校生の時間だ。早く帰ろう。」

こっつしてCAS一日目は終了した。

16 (後書き)

最近テンポが悪くなってるかも・・・

次はサクサク進めたいです

冬の章、このままだと予想以上に長編になりそうです。

CAS二日目。

この放課後は本格的な活動ができる最終日だ。

十万まであと3万9千円。ただし、川口に渡す1万円と吉長さん、岡本さんに渡す4千円、それからクラスの男子に借金した3千円が加わるので、実質5万6千円を稼がなくてはいけなかった。

5万6千円。昨日の収入と比べれば無理のない額のようにだが、二日目というのは恐ろしい。前日声をかけた人にはもう売り付けられないし、「油沢ゼミナール」のAクラス、Sクラスの人数にも限りがある。しかも、同じ条件ばかりにこだわっていると、バレルリスクも高くなる。

そこで今日は、塾のランクをある程度まで落とし、三校を選んでそれぞれの最上クラスを対象にすることにした。

「ねえ、そこのお姉さん。ちょっといい話、聞かない？」

「先輩、僕、K中の野球部に憧れてたんです！ちょっとお話、聞かせてもらえませんか？」

影も高宮も、独自のセールスでどんどん売り上げを伸ばしているようだった。

俺も加わりたいところだが、今日は別の仕事を割り当てられている。

目の前にあるのは「油沢ゼミナール」。そして俺は電柱の陰。

別に隠れる必要もないのだが、大通りの真ん中でじっと突っ立っている訳にもいかず、かといって近くのコンビニで待っていては、素速く行動を起こせない。こうするしかなかったのだ。

しかし、電柱の陰というものは、案外隠れるのに向いていないようだった。片側からは姿を隠しているつもりでも、反対側からは丸見えなのだ。

こんなことに気付かなかつたなんて。探偵なるという将来の道が
一つ消えた瞬間だった。

横を通り過ぎていく小中学生の視線を痛い程に浴びながら、俺は
ただひたすらに待っていた。

18 (前書き)

やっとの更新です！

最近忙しさと戦う毎日です。

登場人物の名前を忘れてたので慌てて読み返しました・・・orz

今日の休み時間のこと。

俺はいつものように教科書やノートを机にさっさと突っ込んで、次の教科の道具を取り出した。欠伸をして伸びをする。それから隣をちらつと見る。

少し疲れたような藤野の横顔。

やはり元気がなさそうなその表情を見て、そういえば藤野に近況報告をしていなかったと気付く。

力になると言った手前、行動を起こしているのに何の報告もしないのは良くない。

藤野だって、目の前にいきなり十万を持ってこられたら戸惑ってしまうだろう。

俺は、長時間の授業のせいでかちかちに固まりそうになっている腰をいたわりながら立ち上がった。

「藤野。」

「なあに。」

「ちよつと話したいことがあるんだけど。」

目で教室のドアを示した。無邪気な中学生の好奇心で溢れているこの場所で、CASの話題を持ち込むのは命取りだ。

勘のいい藤野はすぐに頷いて席を立った。

もう何度も出入りしている資料室で、俺と高宮、影の三人でやっている計画を話した。長い休み時間ではなかったから、かなり手短な報告になってしまったが、仕方ない。

俺は昨日までの売り上げとこれからの計画を話して、報告を終えた。

「全然関係ない人たちを巻き込んだじゃって、ほんとにごめんなさい。こんなことまでしてくれて・・・」

壁に寄りかかった藤野が俯いた。その視線は床のごみの数でも数えるように、あっちへこっちへと定まらない。

藤野はただ俯いて、困ったように「ごめんなさい」とそう言うだけだった。

真面目そうな彼女のことだから、もしかしたらCASの内容を不法な金儲けだと怒るかもしれない、そんなことをしている俺たちに絶望するかもしれない、と考えていた俺は拍子抜けした。

藤野はただ俺の話に相づちを打つだけで、驚くことさえしなかったのだ。

「・・・だ、大丈夫か？」

今にも泣き出しそうな様子の藤野に戸惑った俺はそう声を掛けた。かなり戸惑っていた。目の前で女子が泣く状況は未だに体験したことがなかったからだ。

「大丈夫。ごめんね。」

やはり謝罪の言葉が返ってきた。

俯いて力なく壁により掛かる藤野は、心なしか、俺達に相談を持ちかけた時よりも痩せているように見えた。いや、やつれた、というほうが的確か。

「何か、あったのか？」

そう聞いたが、何かあったことは明白だし、その原因が一目惚れされた大学生であることも分かっていた。

しばらくの沈黙があつて、藤野が重い口を開いた。

「昨日、お姉ちゃんとカケさんが別れたの。」

・・・別れた。昨日。お姉ちゃんと・・・。

俺は何と言えいいのか分からず、「そっか」と間の抜けた言葉を返してしまった。

しまった、と慌てる。これじゃ興味がないと取られてもおかしくない。せめてもうちょっと暗いトーンで発声していれば良かった。

そして、藤野がこんな状態の時に、相手にどう思われるかを気にする自分に失望した。

それから、どこかで聞いたことのある名前に遅れて反応する。カケさん。誰だったか、どこかでそんな呼ばれ方をしている人がいた。

「別れるときにね、『お前、邪魔だよ』って言われたんだって。授業開始のチャイムがどこか遠くで鳴っていた。

今度こそ、俺は何も言えなくなった。

19 (前書き)

半年ぶりの更新です (T・T)

もし今まで読んでくださってる方がいたらごめんなさい。

目次の上に「次話投稿されない可能性があります」「っていう注意の文が載ってしまうのは悲しいです。

塾の講師というものは、大抵が不健康である、というイメージがある。

真つ昼間でも煌々と点いているあの無機質な蛍光灯がそう見せているのかもしれないが、顔色は決して良好とは言えず、常に寝不足を思わせるような目、服装には気を使わない。

くたびれたスーツとチヨークで汚れた指先、これが俺が描く塾講師の姿だ。

それは、大手学習塾「油沢ゼミナール」であっても同じことだった。ただ一人、カケさんを除いて。

三十分間も隠れていた電柱の影からやっと姿を現し、俺は油沢ゼミナールから出てきた長身の青年に声を掛けた。

「カケさん。久しぶりです。俺のこと、覚えてますか？」

塾を辞めた生徒とここで会うことは予想していなかったのだろう、カケさんは驚いていた。

「切磋さんだね。覚えてる覚えてる。誰よりも発音にくい苗字の子だった。」

そう言つてさわやかに微笑む。

そうだ。この人こそが俺を退塾に追いやった張本人である。男女平等主義は変わっていないらしい。相変わらず舌をかみそうな発音だった。

「どうしたの。塾に用事でもあったのかな？もしかして、また入塾テストを受けに来たとか？」

「まさか。もう塾にはこりこりだよ。」

「おいおい、入口を目の前にしてそうということ言つなよな。」

その時、何人かの女子生徒がやかましく近付いて来た。

「カケさん、さよならあ！明日さっきの問題の続き教えてね！」
カケさんが困ったように笑う。

「俺なんかじゃなくて先生にちゃんと質問すればいいだろう。」
「だってカケさんのほうが分かりやすいんだもん。いいじゃん、いいじゃん。授業入ってないんでしょ？」

彼はバイトの大学生なのだが、並外れた人気と解説の分かりやすさから、講師が欠勤の時などは特別に授業を任されることもあるのだ。とても特殊な例だが、もちろん正式には認められていないことだ。

「ね、いいでしょ？カケさん。」

「わかったよ。明日、授業がなかったらな。」

「やったあ。カケさんありがとつ。じゃあ、さよなら！」

「またな。」

カケさんは、軽く手を挙げて女子生徒を見送った。

それにしても、すごい人だ。人を引きつける力というか、そういうものがあるんだろう。人気も信頼も、他のバイトとは比べものにならない程だった。

「で、どうしたんだ？塾に用事があるなら一緒に付いていこうか。」
さりげない優しさに思わず感嘆する。

「いや、今日はカケさんに聞きたいことがあつて来たんだ。」

「俺に？」

「うん。時間、大丈夫ですか？」

ちらりと覗き込んだ腕時計は有名なスイス製だった。

「ああ、今なら大丈夫。でも、もう遅いから手短にね。親御さん心配するだろう？」

「すぐに終わらせるから。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0944n/>

切磋琢磨の観察日記

2012年1月2日10時49分発行